

長岡京市文化財調査報告書

第 19 冊

1987

長岡京市教育委員会
長岡京跡発掘調査研究所

長岡京市文化財調査報告書

第 19 冊

1987

長岡京市教育委員会
長岡京跡発掘調査研究所



(1)上里遺跡 西ノ口地点 (GNC-2地区) 弥生時代溝S D4804 (南東から)



(2)上里遺跡 西ノ口地点溝S D4804出土弥生土器

序 文

長岡市の北部にある井ノ内地区は、近年まで開発の手をまぬがれ、農村としてのたたずまいをよくとどめてきました。しかし、十年前ごろから学校建設や道路の整備などにより、周辺で宅地開発が進んできました。特に、集落の西側に建設された都市計画道路により、当該地区が洛西ニュータウンにぬける通過地点となり、一層宅地開発に拍車をかけ、景観は一変しつつあります。

この地区には、関西地方でも珍しい縄文時代後期の住居跡が昨年発見されたのをはじめ、『統日本紀』大宝2(702)年7月4日条にみえる乙訓坐火雷神社(現角宮神社と推定)や古墳時代後期の前方後円墳である井ノ内車塚古墳などがあり、今から1万年前から人々が営々と生活を営んできたことが明らかになってきており、長岡市の歴史を解明していく上できわめて重要な地区であります。

今回報告する発掘調査は、当該地区の開発のはしりとなった宅地造成工事に伴うもので、その内容は弥生時代の集落跡と長岡京跡に関するものであります。

これらの調査成果が郷土の歴史を解明していく資料として広くご活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、この報告書を刊行するにあたり、困難な体制の中でご尽力をいただいた長岡京跡発掘調査研究所をはじめ、(財)長岡京市埋蔵文化財センターなど関係者の方々、また、発掘調査に深いご理解をいただいた土地所有者の方々に紙上をお借りし、厚くお礼申し上げます。

昭和62年3月

長岡市教育委員会

教育長 湯 浅 成 治

刊行に当って

この報告書は当研究所が、長岡京市教育委員会から委託を受けて、井ノ内地区で実施した長岡京跡右京第29次（7 ANGHD—2 地区）と、右京第48次（7 ANGNC—2 地区）の発掘調査の概要の報告書である。

初めに当り、発掘調査の開始から本報告書作成に至る間にお世話になった各機関や関係の人びとに心からお礼を申し上げる。

この2箇所の調査面積は狭く、トレンチの幅も狭かったので、遺構については1箇の井戸以外余り顕著なものは見つからなかった。しかし遺物についていえば狭い区域の発掘調査に似合わず、多くの貴重な遺物を採集することができて、成果は大きかったということができる。

中でも弥生中期後半の時期の土器の完全に近く復原できたものを発掘したり、長岡京期の有力者の家屋の土台に使われたと思われる凝灰岩片や土馬を発掘できることも貴重な収穫であった。

ちなみに井ノ内地区は、全国にも珍しく、弟国宮と長岡京という2つの古都が営まれた長岡京市の中でも、特別に古く開かれた地区である。また山城の一宮として全国でも特別社格の高い下賀茂神社の祭神の夫であり、上賀茂神社の祭神の父である火雷神を古くから祀ってきた乙訓坐火雷神社の鎮座おとくににいますほのかづちします土地として、永く栄えていたところであることは記録によって早くから考えられてきた。

また発掘によっても、先土器・縄文・弥生・古墳・飛鳥・奈良・長岡・平安・鎌倉の各時代の遺物や遺構が数多く発掘されている。その中でも縄文時代の家屋跡は旧乙訓郡内で唯一のものである。また長岡京期の貴族の屋敷のうちで、最も大きな掘立柱を使用されていたものもこの地区的第十小学校建設の事前発掘の際に見つかっている。この地区的戦前まで人びとの住んでいた民家の西に接して行われた、この発掘の成果を利用して、古代史研究や地域史研究に活用していただければ、幸いこれに過ぐるものはない。

昭和62年3月

長岡京跡発掘調査研究所

所長 中山修一

凡 例

1. 本書は、昭和54年度より昭和55年度までの間に、長岡市教育委員会が主体となり、長岡京跡発掘調査研究所に委託して実施した発掘調査に関するものである。このうち、本市井ノ内地域で実施した発掘調査の概要を収録した。
 2. 本書に収録した調査地は付表一に、その位置は第1図に示した。
 3. 各発掘調査の次数は、長岡京の右京城の調査件数を通算したものである。調査地区名のうち、前半は奈良国立文化財研究所による分類表示に従った。すなわち、「7」は平安時代、「A」は都城跡、「N」は長岡京の頭文字を表わしている。後半は、調査地の旧地名の略号で調査地点を示した。旧地名の略号は、高橋美久二「長岡宮跡昭和51年度発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1977年3月）に従った。さらに、末端に付した数字は、同地区内の発掘調査が通算何回目であるかを示す。
 4. 長岡京の条坊名については、向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集の挿図第126図、長岡京条坊図の呼称法に従った。
 5. 本書収録の各調査では、平面直角座標系VIにより測量した。
 6. 本書の編集は、財団法人長岡市埋蔵文化財センター調査員岩崎 誠が行った。
 7. 現地調査から本書作成に至るまで、下記の方々他、調査地周辺在住の人々に御協力いただいた。さらに、長岡京跡発掘調査研究所総務の百々瀬ちどり氏（現・長岡市市秘書課広報係市史編さん室嘱託）及び、鈴木美美子氏には大変な御苦労をおかけした。記して感謝したい。
- 作業員 吉田角太郎、村上藤一、木村芳久、生嶋幸男、吉田保定、吉田藤三郎
 助助員・整理員 児島昌造、峯 光治、小嶋正亮、田中良幸、滝本直人、辻林磨宏、白川 成明、長谷川浩一、奥井千鶴、川端篤子、吉井千恵
8. 参考文献に掲載した報告書のうち、以下のものについて、書名と編集者名を簡略化した。
 - 京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』19〇〇年
 『京都府概報』19〇〇年
 - 長岡市教育委員会『長岡市文化財調査報告書』第〇冊
 『長岡市報告書』第〇冊
 - 京都市文化観光局
 京都市文觀
 - 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
 (財) 京都市埋文研

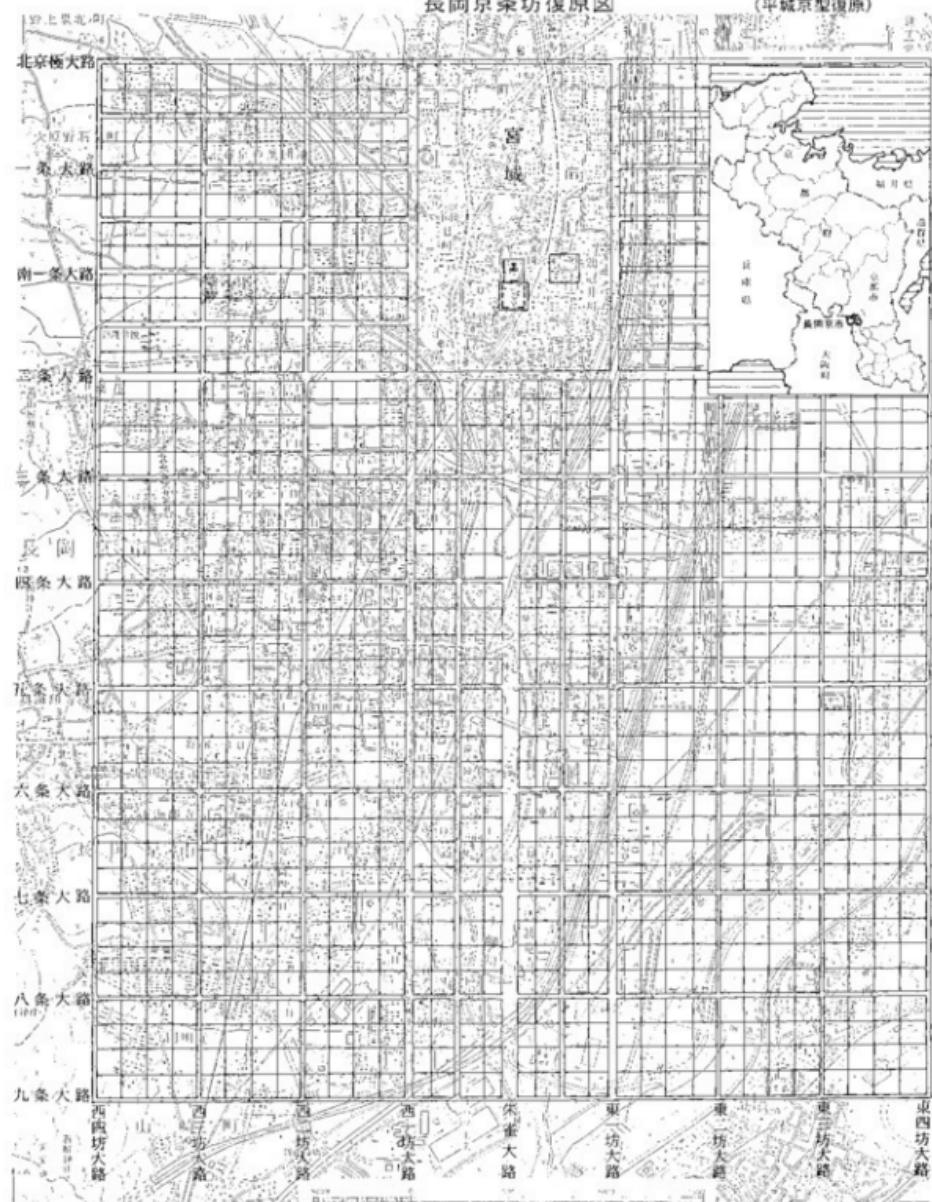
9. 本報告の調査に関する整理作業は、昭和56（1981）年に終了し、挿図プレートの作成は、昭和57（1982）年にはほぼ完了していた。しかし、本市の文化財調査体制及び組織に大きな変更があり、研究所の発掘調査機能を停止した。そして昭和59（1984）年以降、毎年度研究所の受諾事業に関する報告書を作成する計画を企てた。本報告書は、その一部である。

付表一 本書報告調査地一覧表

長岡京跡 調査次数	地区名	所 在 地	所 有 者 (原 因 者)	調 査 期 間	調査面積 (m ²)	遺 跡 名
右京跡8次	7 ANGHD- 2	長岡京市 井ノ内広海道17	㈱東映不動産	1980年 2月15日～3月15日	56.7	右京二条三坊十六町 井ノ内遺跡
〃48次	〃 GNC- 2	同 井ノ内西ノ口16	㈱東映不動産	1980年 9月12日～10月14日	88.2	右京二条三坊十六町 上里遺跡

長岡京条坊復原図

(平城京型復原)



第1図 本書報告発掘調査地位置図

目 次

第1章 長岡京跡右京第29次(7ANGHD—2地区)調査概要

—右京二条三坊十六町・井ノ内遺跡—

1.	はじめに	1
2.	調査及び整理の経過	3
3.	検出遺構	5
4.	出土遺物	9
5.	まとめ	17

第2章 長岡京跡右京第48次(7ANGNC—2地区)調査概要

—右京二条三坊十六町・上里遺跡(西ノ口地点)—

1.	はじめに	19
2.	調査経過	20
3.	検出遺構	22
4.	出土遺物	26
5.	まとめ	30

図 版 目 次

卷頭図版 (1)上里遺跡 西ノ口地点 (GNC—2 地区) 弥生時代溝SD4804 (南東から)
 (2)上里遺跡 西ノ口地点溝SD4804出土弥生土器

長岡京跡右京第29次調査 (7ANGHD—2 地区)

- | | |
|--|----------------------|
| 図版一 (1)調査前風景 (東から) | (2)トレンチ全景 (西から) |
| 図版二 (1)井戸SE2907断面 | (2)井戸SE2907第1層遺物出土状況 |
| (3)井戸SE2907第1層遺物出土状況 | (4)井戸SE2907第1層遺物出土状況 |
| (5)井戸SE2907第2層遺物出土状況 | (6)井戸SE2907第2層遺物出土状況 |
| (7)溝SD2909全景 | (8)溝SD2909遺物出土状況 |
| 図版三 井戸SE2907出土須恵器・緑釉陶器 | |
| 図版四 井戸SE2907出土土師器・須恵器 | |
| 図版五 井戸SE2907出土土師器・瓦・凝灰岩 | |
| 図版六 (1)井戸SE2907出土須恵器・灰釉陶器 (2)各遺構・包含層出土土馬 | |
| 図版七 各遺構出土土器 | |
| 図版八 (1)井戸SE2907出土灰釉平瓶 | (2)土壤SK2913出土遺物 |
| (3)井戸SE2907出土土師器蓋つまみ | (4)井戸SE2907出土黒色土器 |
| (5)土壤SK2913出土鉄釘 | (6)溝SD2909出土土師器高环 |

長岡京跡右京第48次調査 (7ANGNC—2 地区)

- | | |
|----------------------------|------------------------|
| 図版九 (1)調査地近景 (北東から) | (2)上層遺構全景 (西から) |
| 図版一〇(1)下層遺構全景 (西から) | (2)下層遺構全景 (南東から) |
| 図版一一(1)溝SD4804遺物出土状況 (南から) | (2)溝SD4804遺物出土状況 (東から) |
| (3)溝SD4804遺物出土状況 (南西から) | (4)溝SD4804遺物出土状況 (東から) |
| 図版一二溝SD4804出土遺物 | |
| 一三遺構・包含層出土遺物 | |

挿 図 目 次

第1図	本書報告発掘調査地位置図	V
-----	--------------	---

長岡京跡右京第29次（TANGHD—2地区）調査

第2図	発掘調査地位置図	1
第3図	発掘調査地周辺地形図	2
第4図	遺構配置図	4
第5図	井戸SE2907実測図	6
第6図	土壤SK2913実測図	8
第7図	井戸SE2907出土遺物実測図	10
第8図	井戸SE2907出土遺物実測図	11
第9図	井戸SE2907出土瓦実測図	14
第10図	土壤SK2913出土遺物実測図	15
第11図	各地区出土遺物実測図	16

長岡京跡右京第48次（TANGNC—2地区）調査

第12図	発掘調査地位置図	19
第13図	遺構配置図	20
第14図	堆積土層図	21
第15図	土壤SK4814実測図	22
第16図	土壤SK4843実測図	23
第17図	溝SD4804実測図	25
第18図	溝SD4804遺物出土状況実測図	26
第19図	溝SD4804出土遺物実測図	28
第20図	各遺構出土遺物実測図	30
第21図	長岡京市井ノ内～第十小学校模式断面図	32

付 表 目 次

付表-1	本書報告調査地一覧表	iv
付表-2	井戸SE2907出土遺物時期区分表	18
付表-3	井戸SE2907出土遺物組成表	18

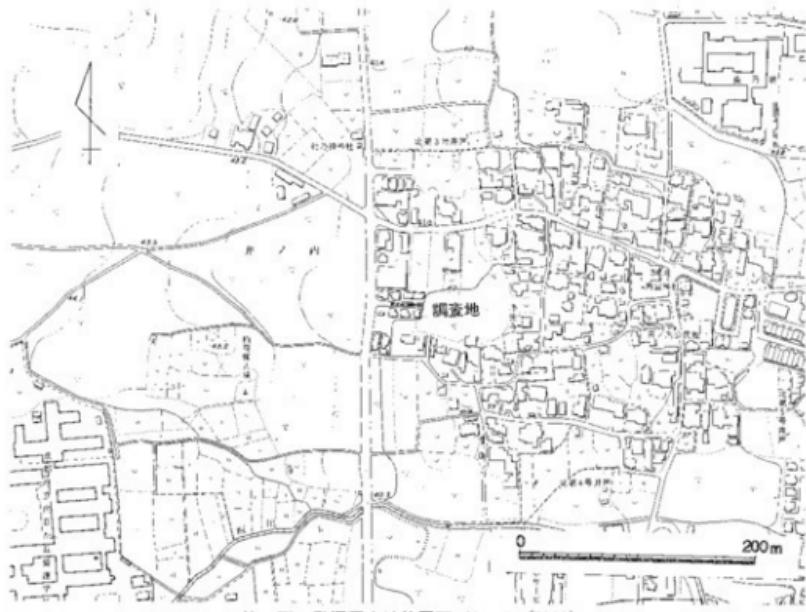
第1章 長岡京跡右京第29次調査概要

長岡京跡右京二条三坊十六町
井ノ内遺跡

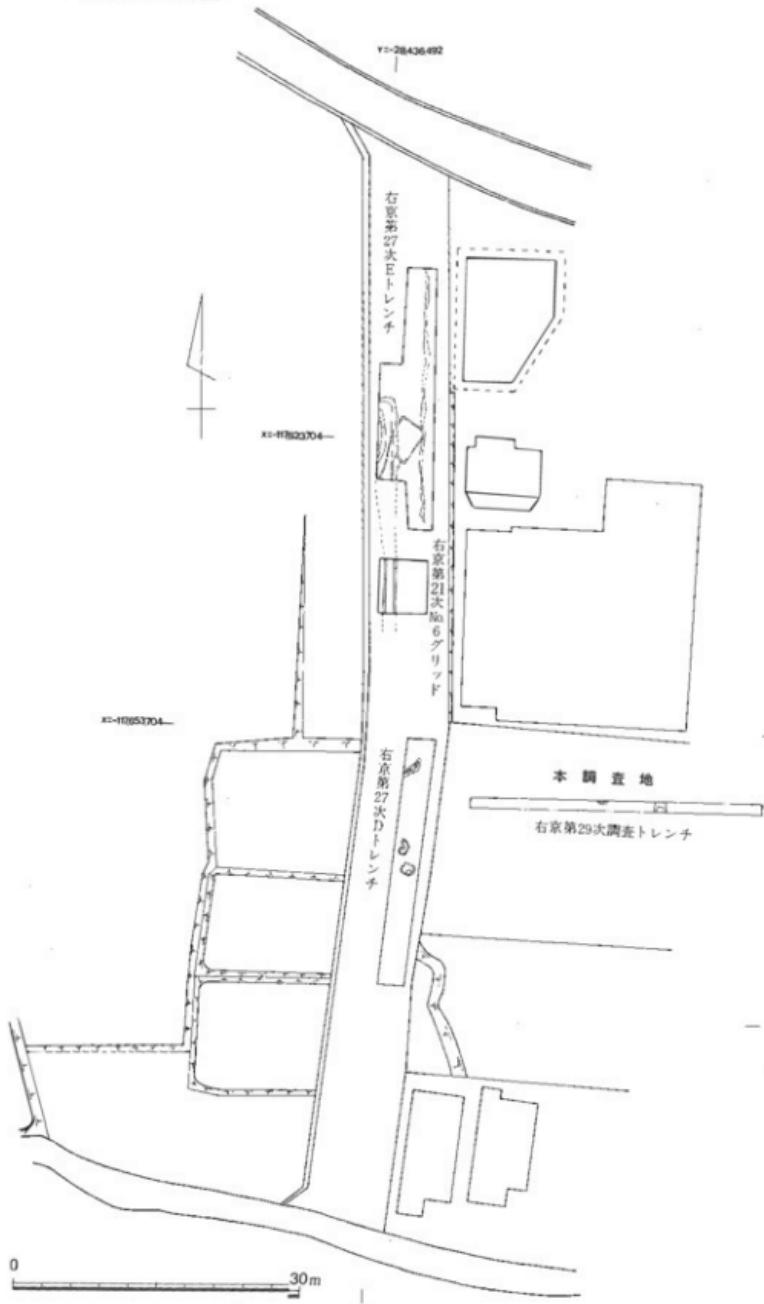
第1章 長岡京跡右京第29次(7ANGHD—2地区)調査概要 ——右京二条三坊十六町・井ノ内遺跡——

1. はじめに

- 1 本報告は、1980年2月15日から3月15日まで、長岡京市井ノ内広海道17（第2図）で実施した（株）東映不動産の宅地開発に伴う発掘調査に関するものである。
- 2 本調査地は、長岡京跡右京二条三坊十六町の推定地にあり、井ノ内遺跡の範囲内にもあるため、幅1.5m、長さ37.8mのトレンチを東西に長く設定し、面積56.7m²の調査を行った。
- 3 本調査は、長岡京市教育委員会が主体となり、長岡京跡発掘調査研究所に委託して行った。現地調査は、当時長岡京市教育委員会嘱託にあった岩崎誠が担当した。
- 4 本報告書作成には、現在財団法人長岡京市埋蔵文化財センター総務係の白川成明氏の多大な協力を得た。調査に関連して、京都府教育委員会の奥村清一郎氏、高橋美久二氏他、多くの方々の御助言、御指導、御協力いただいた。
- 5 本書は、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターの協力により、(現)同センター調査員の岩崎が執筆・校正に当った。



2 調査及び整理の経過



第3図 発掘調査地周辺地形図 ($S = 1/600$)

2. 調査及び整理の経過

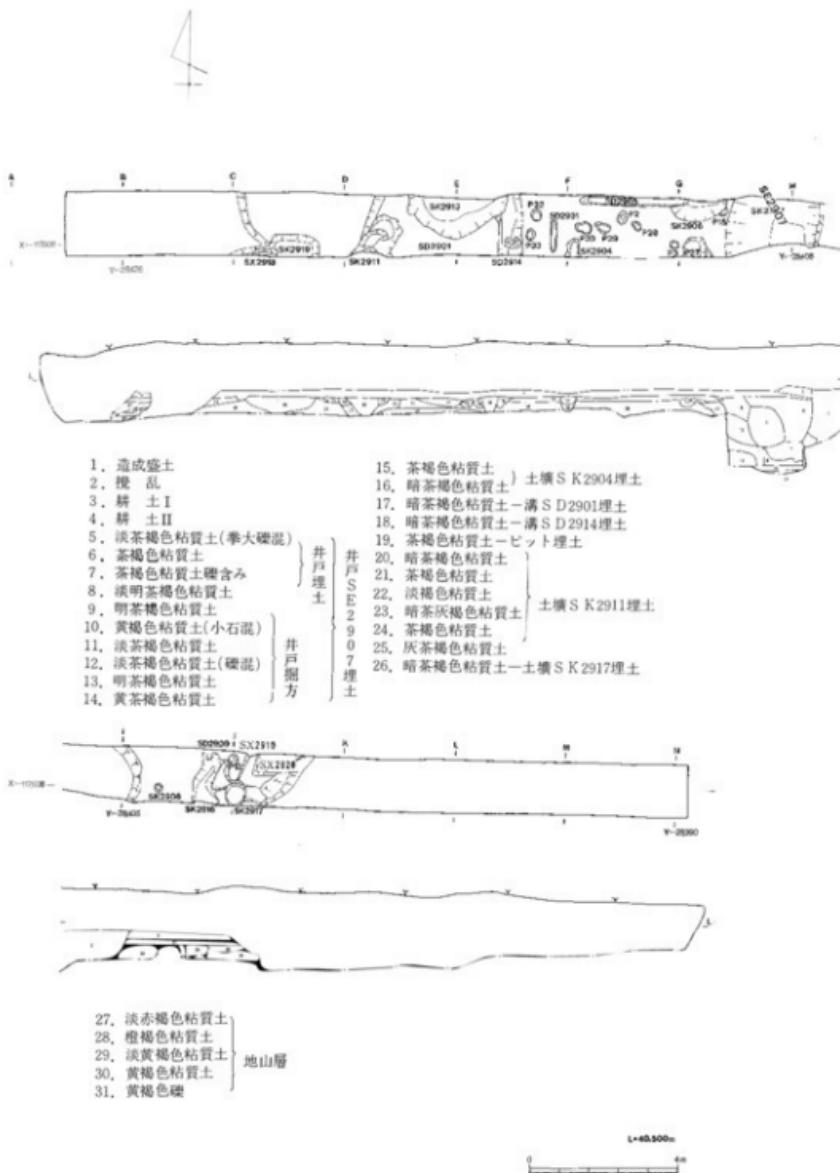
当調査地は、井ノ内から神足へ張り出す段丘上に位置している。調査地の西側には、新設された市道3003号線が南北に走る。この道路下に埋設されている流域下水道の建設工事に伴い、京都府教育委員会により、長岡京跡右京第21・27次発掘調査として、昭和53年の試掘、昭和54年^{注1}の本調査が行われている（第3図）。この調査で、当調査地に西接して設定されたDトレンチでは、7世紀初期の土壙等が検出されている。また、周辺のトレンチ（A～Hトレンチ）及びグリッド（No.1～No.8）からは、縄文時代から古墳時代や奈良時代から鎌倉時代までの遺構や遺物が検出されており、これらに関する遺跡が、当調査地にも及んでいると考えられた。長岡京跡については、右京二条三坊内にあり、宅地や、あるいは二条第一小路が一部にかかる可能性のある所に位置する。

立地及び周辺地の調査成果から、多くの時代の遺構、遺物が検出される可能性が高いと予想された。のことから、調査対象地の新設道路予定位置に、トレンチを設定した。調査前は、すでに盛土造成がなされており、この上面で畑作が行われていた。調査地の盛土造成がなされる前は竹林であったが、これを切り開いて畑地としていたという。このため、重機により表土を除去する作業から始めた。この際、土層及びその質や性格を考慮しながら掘り下げを行った。その結果、厚さ0.1mの耕作土下に厚さ1.3mの盛土と、その下に厚さ0.2mの旧畑作耕土が確認できた。また、耕土には竹の地下茎が含まれており、元来竹林であったことを裏づけた。これらは重機により除去し、以下を人手による作業とした。遺構検出作業のおりに、ごく一部に中世包含層が検出されたが、大部分は黄褐色の地山層が地盤となっていた。トレンチは、土置場の関係上、幅狭い溝掘り調査となった。このため、東西に長いトレンチを3mごとに南北に区切り、地区名を西から順にアルファベットを付して、A、B、C……Nと呼ぶ地区割りを行った。この地区割りは、国土座標を基に行い、座標数値は第3図に示した。また、この図には、京都府教育委員会が行った調査地との位置関係も明らかにした。

遺構は、古墳時代から鎌倉時代のものがあり、幅狭いトレンチにもかかわらず、多くの成果があった。このため、3月13日に地元の方々及び乙訓地域の文化財関係者を対象に、現地説明会を行った。⁽²⁾

現地説明会後は、地山の断ち割り作業及びトレンチ断面実測作業、各実測図の確認、点検作業を行って、現地調査を終了した。

整理作業は、昭和56（1981）年に終了し、挿図プレートの作成が1982年にほぼ完了していた。しかし、乙訓地方の二市一町の文化財関係の体制及び組織に大きな変更があった。このため、一時的に当報告書作成に関する作業を中断していた。1983年からは、再び長岡京跡発掘調査研究所の報告書作成作業が具体的になり、1984年、1985年と毎年報告書の刊行が実現した。本報

第4図 遺構配置図 ($S = 1 / 160$)

告は、その一端を担うものとして、今回の作業に入ったのが1986年6月末のことであり、前2冊と同様に、長岡京市教育委員会と、財長岡京市埋蔵文化財センター及び、関係機関の多くの方々の協力により完成することができた。

3. 検出遺構

当調査では、古墳時代後期、平安時代初期（長岡京期）・中期、鎌倉時代の3時代にわたる遺構や遺物が検出された。古墳時代の遺構には、土壙（SK2913）、平安時代の遺構には、井戸（SE2907）、鎌倉時代の遺構には、土壙や溝、ピットなどがある。しかし、当調査地の盛土造成を行う際に、遺構検出面が各所で大きく擾乱されており、また、トレンチの幅が約1.5mという狭いものであったこともあって、各遺構の規模や性格が明確にできたものは数少ない（第4図）。このような悪条件の中にあって、比較的良好な残りをなす遺構や、一時期の一括遺物を得ることができた。中でも、井戸SE2907と土壙SK2913は、正確な規模を明らかにするには及ばなかったものの、良好な一括遺物に恵まれ、当調査における大きな成果となった。この井戸と土壙については、後にくわしく記すことにし、他の遺構について先に述べる。

中世溝（SD2901・2905・2914・2931）

土師器皿の小片や瓦器の小片等の中世遺物を包含する溝である。このうち、南北方向の溝1条（SD2914）は、幅0.7m、深さ0.2mで、幅は広いが非常に浅い。東西方向の溝1条（SD2905）は、幅0.2m、深さ0.07mで、幅狭く浅い溝である。溝SD2901は、幅4m～4.8m、深さ0.2mを測り、浅く広いものであった。当溝は、両岸が平行せず、南北方向にありながら、南方へ広がった状況が見られる。東肩は、溝SD2914の東肩と共通しているが、溝SD2901の方が新しい。

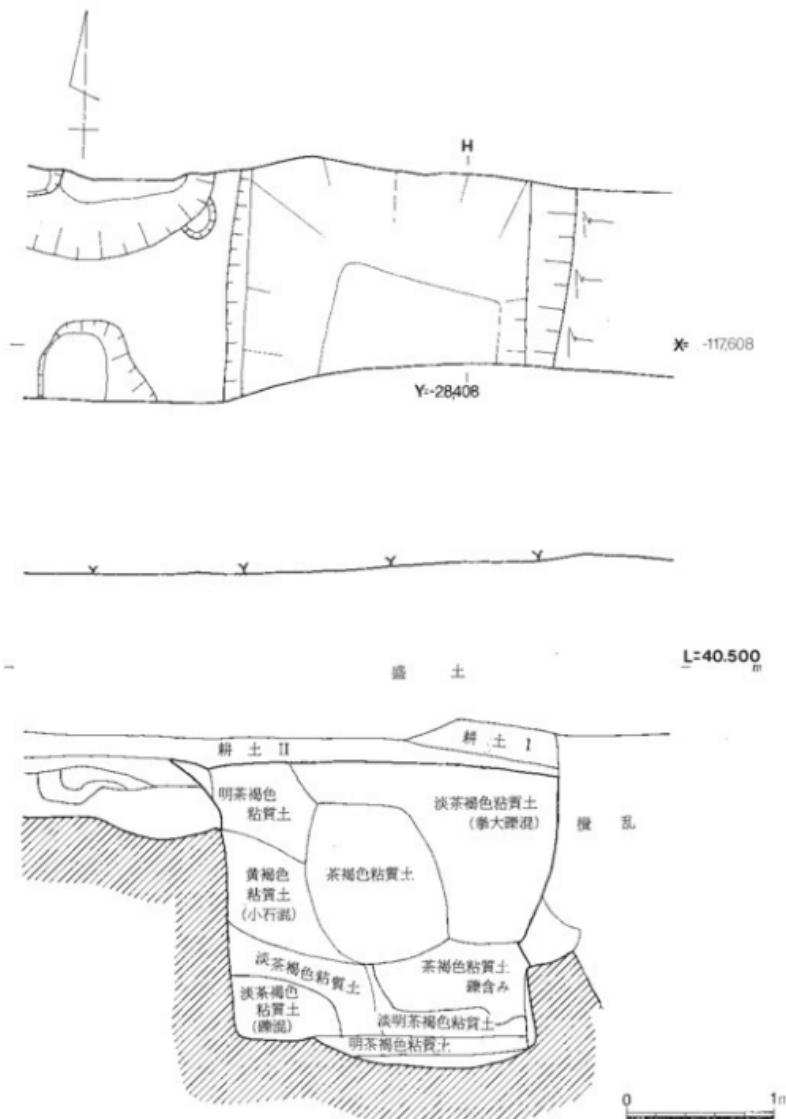
中世遺構は、上記溝の他、不定形土壙SX2920、SX2910などがあり、小ピット群もこの時代のものが多いと思われる。これらの遺構は、土師器皿や瓦器の特徴から、14世紀に入るるものと思われる。

平安時代の遺構（土壙SK2911・2916、ピット）

平安時代の遺構には、先にふれた井戸SE2907がある他、明らかなものはない。遺構埋土の特徴から、同時期と考えられるものに、土壙SK2911・2916などがある。いずれも不定形な平面形である。土壙SK2911は溝状に長いもの（検出長1.15m）で深さ0.14mを測る。土壙SK2916は、不整円形をなし、径0.7m、深さ0.29mを測る。この他、ピット（P25・29・32）等がある。これらは、遺物をほとんど含まず、時期の確定は困難である。

古墳時代の遺構（土壙SK2904・2917・2919、溝SD2909）

古墳時代のものは、先にもふれた土壙SK2913の他、数個の土壙がある。土壙SK2904は溝状に長い形をなし、断面U字形に掘り込まれている。その規模は、検出長0.5m、短径0.3mで、楕円

第5図 井戸SE2907実測図 ($S = 1/40$)

形を呈し、深さ0.3mを測る。土壙SK2917は、円形の平面形をなし、径0.55～0.60m、深さ0.23mを測る。この他、土壙SK2919も同時期と思われる。この土壙は、隅丸方形の平面形をなし、南北検出幅0.5m、東西1.3mで深さ0.06mを測り非常に浅い。溝SD2909は、幅0.5m、深さ0.8mを測る。いずれも、遺物はほとんどなく、小片が数点ずつ出土したもので、確実な時期決定はしかねるが、6世紀後半から7世紀前半に入るものであろう。

以下、先にふれた、平安時代の井戸SE2907と、古墳時代土壙SK2913について、記述する。

井戸SE2907（第5図）

H区で検出された井戸で、平安時代の一括遺物が出土している。掘方は、ほぼ南北一東西方向に各辺をもつように掘られた方形の平面形をもつ。南北の長さは、両辺ともトレンチ外にあるため明らかにできなかったが、東西2mを測り井戸底面の検出状況から、一辺2mの正方形平面形になるものと察せられる。底面も方形であり、南辺がトレンチ外に出るもの、一辺1m四方の正方形に近いと思われる。底面の各辺は北東一南西、北西一南東方向にあり、検出面の方向より東にふれた方向にある。深さは、検出面から2mを測る。埋土は、掘方埋土と、井戸側取り出し穴埋土に分かれ、井戸側は残存していなかった。掘方埋土は、北辺から西辺にかけて幅広く検出されたが、井戸側取り出し穴埋土は、円形（直径約0.8m）の平面形で検出された。断面観察では、掘方埋土は6層からなり、そのほとんどが帯状またはレンズ状に認められるが、井戸側取り出し穴の埋土は4層からなり、不規則不自然な堆積状況であった。遺物の大半は井戸側取り出し穴埋土中にあり、中位（淡茶褐色粘質土と茶褐色粘質土）からの完形品出土が多かった。井戸底は砂層になっており、当時の水脈であったと思われる。

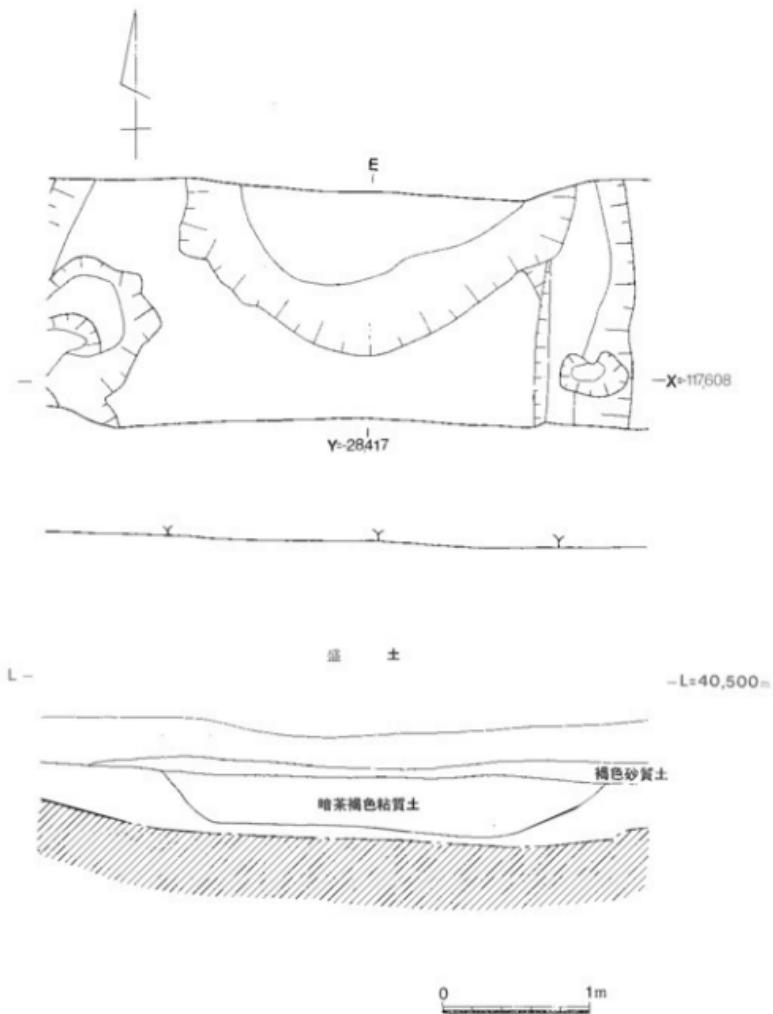
土壙SK2913（第6図）

当土壙は、E区から検出されたもので、橢円形と思われる南半分を検出した。その規模は、東西の長軸径3m、短軸径の検出長1.1mで、深さ0.3mを測る。検出面からなだらかに窪む土壙で、底は平坦面になっていた。埋土は一層（暗茶褐色粘質土）からなる。当土壙埋没後に中世包含層（褐色砂質土）が堆積している。遺物は、埋土の下半部から多く出土し、その大半が当土壙の中央部付近から、土壙底面に接して検出された。出土した遺物は、7世紀後半の一括遺物である。当調査地内では、当遺構がどういう性格のものであるか明らかにできないが、しかし、近隣地の調査成果を考え合わせると、当時の集落内にあり、しかも、住居区域の中に含まれていることは明らかと思われ、直接的に生活と係る遺構、例えば生活廃棄物処理穴や祭祀に関する遺構の可能性等がある。遺物内容では、生活に直接的に係る内容のものであり、祭祀的色彩は薄いと思われる。このような土壙は、当調査地周辺でも幾つか検出されており、竪穴住居址の検出範囲と重なっている点興味深い。

以上、主な検出遺構について述べた。これらの他、全く時期が明らかでない土壙やピットがかなりある。遺物の項で見られるように、包含層からは、古墳時代後期から終末期にかけての

8 検出遺構

遺物や、平安時代のもの等があり、これらのいずれかの時期のものと思われる。また、各遺構から、長岡京に関連するものも混入して出土しており、長岡京期の遺構がないとは断言できない。また、鎌倉時代の遺物も細片ながら、現在の井ノ内集落に重なって分布している。



第6図 土壌SK2913実測図 ($S=1/40$)

4. 出土遺物

先にもふれたが、今回の調査では、中世包含層や各遺構から出土する遺物は細片が多かった。したがって、図示できる遺物の量は、遺構の数に反して少なかった。しかし、これらの遺構群のうち、井戸SE2907と土壤SK2913からは、まとまった一括遺物が得られた。以下、主に、この井戸と土壤の出土遺物について記し、他の出土遺物は、最後にまとめて述べることにする。

井戸SE2907出土遺物（第7～9図）

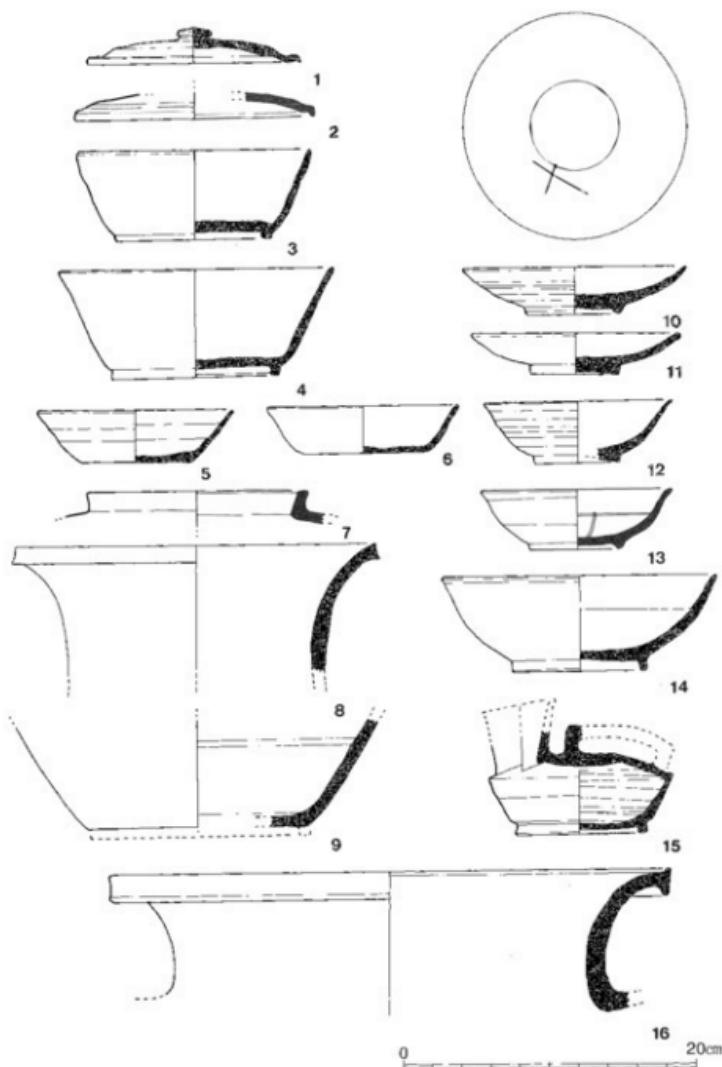
当遺構からは、長岡京期の遺物や古墳時代の遺物を含みながらも、平安時代前期の一括遺物が出土している。実測可能なものは35点で、そのうち、完形又はそれに近く復元しうるものは、13個体であった。器種器形の明らかに判別できるものは、付表一2の通りである。遺構の項でも記したとおり、大部分は井戸側取り出し穴と思われる埋土から出土したものである。

出土遺物には、須恵器壺A・壺B、壺B蓋、高壺、壺A、壺G、壺L、甕、縁釉・無釉陶器塊B、皿B、唾壺、灰釉陶器壺A、壺N、平瓶、円面鏡、土師器壺A、壺B、皿A、甕A、高壺、羽釜、カマド、黒色土器の土器類の他、平瓦、丸瓦、軒平瓦等の瓦類や、土馬がある。

須恵器壺A 壺Aは、平底から屈曲して直線的にやや外開きに立ち上がる口縁をもつ形態である（第7図5・6、図版三—5・6）。小片を含めて4個体があり、いずれも軟質で、焼きがあまい。淡灰色に焼き上がったもの（6）は、胎土が良く、器壁の厚さも平均している。灰白色に焼き上がったもの（5）は、砂粒が多く、内面見込みにロクロナデの凹凸を残し、やや粗製である。後者は後出的であろうと思われる。底部底面に板压痕が認められるものがあり、焼成前の乾燥時に付いた痕跡と思われる。口縁径13.3～13.6cm、器高3.4～3.7cmを測る。

須恵器壺B 壺Bは、壺Aの形態に断面台形状の低い高台を貼り付けたものである（第7図3・4、第8図24・25・27、図版三—3・4、図版四—24・25・27・60・61）。小片を含めて9個体あり、このうち1点のみ灰白色で軟質のものがある他、いずれも硬質に焼き上がっていいる。口縁部から底部まで残るものは2点（3・4）あり、法量に差が認められる。他の小片は底部片（24・25・27）や口縁部片（60・61）があり、体部片も数点ある。これらも法量に差が認められる。法量の統計からは、壺BI=高台径12.8cm、壺BII=高台径約11.3cm、口径約18.5cm、器高約7.2cm、壺BIII=高台径10～10.8cm、口径約16cm、器高約6cmに分けることができる。高台内の底部外面は、いずれもヘラ起こし痕を残す。高台付近は、丁寧にナデ調整を施しているが、それより内は荒くナデているものと、ヘラ起こしのままにするものがある。内面は丁寧なロクロにナデを施し、内面見込みには不定方向の仕上げナデが認められる。仕上げナデは、幅広い単位で数回行うものと、指先程度の幅で幾条も認められるものがあり、後者は、荒っぽい傾向にある。

須恵器壺 壺類には大小の製品があるが、完形に復せるものはない。壺Aは、最大径が体



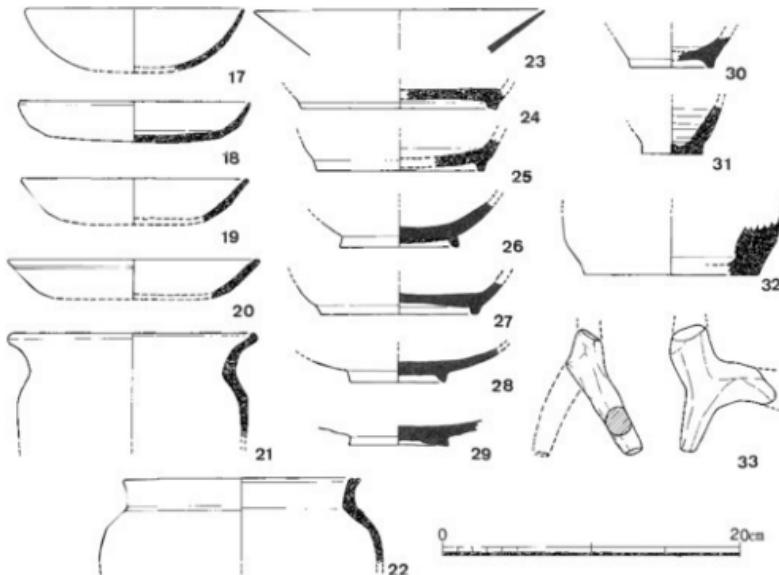
第7図 井戸SE2907出土遺物実測図 (S=1/4)

部上半に球形に近い体部に、短く直立する口縁部をもつ薺壺の形態である（図版六一(1)97）。体部から口縁まで全面ナデ調整を施している。口縁端部は、水平近くに平坦面をつくりだしている。壺Gは、糸切痕を残す平底に、長く上広がりの体部からなめらかにつぼまり、屈曲して外反気味に広がる長い口縁をもつものである（図版六一(1)89・90）。内外面にロクロナデの痕を明瞭に残し、内面にはしばり目がめだつ。壺Lは、高台のある底部に、体部上半に最大径をもつ球形に近い体部と、細くつぼまった頸部から、屈曲して外反する口縁をもつ（第8図30、図版六一(1)30・92～95・101）。内外面丁寧なナデ調整を施す。他に、糸切の平底に、やや長胴化した体部とつぼまった頸部からやや外反し、口縁端部外面を玉縁状に厚くして、端部を尖り気味におさめたものもある（第8図31、図版六一(1)31・98～100）。前者が古く、後者は新しい形態である。

これらの他、平底の破片（第8図32）と高台を有する底部片（第7図9）がある。

須恵器甕 甕は、口縁部が2形態あり（第7図8・16）、他は体部片である。口縁部は、大きく開くもので、口縁端部が肥厚して外側に面をもつもの（8）と、水平近くまで広がり、端部を上下に拡張するもの（16）がある。体部片は、外面に平行叩目をもつものや格子目叩きを施すものがあり、内面には、いずれも青海波あて具痕をとどめている。

須恵器壺B蓋 壺B蓋は、完形に復元できるもの1点（第7図1）の他、口縁部片6片、天井部片7片がある。口縁部はいずれも屈曲し、端部を下方へ折り曲げているものである。天井



第8図 井戸SE2907出土遺物実測図 (S=1/4)

部は、いずれもつまみをもつと思われる。天井部外面は、ヘラ起こしの痕を残す荒いナデが施されている。口径は、16.4cm前後のもの（2）と、14.5cm前後のもの（1）がある。

須恵器高坏 高坏は、柱状部で、灰白色に焼き上げられている。胎土は精良な粘土を用いている。坏部内面中央には、仕上げナデが認められる他、坏部底面から柱状部まで丁寧なナデが施されている。柱状部は裾に向かって外反気味に開いている。

縁釉・無釉陶器塊B 内彎する体部からなめらかに外反する口縁をもち、突出した底部を作り出した形態のものである（第7図12～14、第8図26、図版三-12～14・26・54）。ⅢBとともに底部に特徴が顕著である。縁釉陶器の底部には、体部から突出し、底面が平底のもの（A形底と呼ぶ）、突出した底部の底面を凹面状に削り、丸盤形彫刻刀状の工具で凹線状の園線を1帯又は2帯巡らされた、いわゆる蛇ノ目高台のもの（B形底）、断面台形状の輪高台を削り出しているもの（C形底）、輪高台を貼りつけているもの（D形底）がある。ここで出土したものは、B形底（12・29・54）とC形底（13・14）の2形態である。完形に復せるものは、3個体（12～14）で、全体の法量からは、大型（14）と小型（12・13）に分類できる。さらに、底径から細分でき、それぞれ、塊BII=底径約9cm、口径約18.4cm、器高6.7cm、塊BIII=底径約7.8cmのもの、塊BIV=底径約6.3cm、口径約13cm、器高約4.1cmのものとすることができる。底部の形態との組み合わせは、塊BIIがC形底1個体（14）、塊BIIIがB形底1個体（43）とC形底1個体（26）、塊IVがB形底1個体（12）とC形底1個体（13）となっている。これらの塊Bのうち、施釉したものは塊BII1個体（14）だけであった。

縁釉・無釉陶器塊B 浅く内彎する器体に、突出した底部を作り出したものである（第7図10・11、第8図28・29、図版三-10・11・28・29・53）。このうち、施釉されたものではなく、完形になるものは10・11の2個体である。底部の形態は、塊Bと同様の特徴をもち、B形底（11・29）とC形底（10・28・53）がある。これらは法量から、ⅢBII=底径約6.7cm、口径15.3mm、器高3.3cmのものと、ⅢBIII=底径6.3cm、ⅢBIV=底径6.1cm、口径14.2cm、器高2.8cmのものに分けることができる。さらに、底部の形態との関係は、ⅢBIIがB形底1個体（29）とC形底1個体（10）、ⅢBIIIがC形底1個体（28）、ⅢBIVがB形底1個体（11）とC形底1個体（53）となっている。

灰釉陶器壺A 壺A（第7図7、図版七-7）は、須恵器壺Aと同じ形態のもので、外面全体に灰釉が施され、特に口縁部から肩部にかけて厚く、濃緑灰色に発色している。体部内面に細かい青海波あて具痕を残すが、内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。素地は灰褐色に発色した精良な胎土である。

灰釉陶器平瓶 平瓶は、完形に復元できるもので、口縁部を欠く（第7図15、図版八-1）。貼り付け高台を有し、把手は扁平な粘土帯によって作られている。体部は直線的に外開きに立ち上がり、天井部は凸レンズ状に彎曲している。体部外面は天井部と高台部を除いてヘラ削

りを施し、全面にナデ調整が行われている。釉は、口縁部から体部上半部に厚くかかり、濃緑色に発色している。

灰釉陶器円面硯　円面硯は、脚部の小片が1点出土している(図版六一(1)88)。全形は明らかでないが、脚部に長方形透し孔とヘラ描きの縦線文を施すもので、据部の屈曲する位置と脚部上端に沈線が各1条巡らされている。釉は内外面にかかり、緑褐色に発色している。素地は、暗灰色に発色しているが、精良な粘土を使用している。

灰釉陶器壺F　壺Fは、双耳壺と思われる肩部の破片が1点ある(図版六一96)。ヘラにより丁寧に成形された耳部に、直径5mmの円形孔を設けている。体部は、内外面とも丁寧にナデ調整されている。釉は外面全面にかかるが、薄く、剥落が著しい。釉色は淡緑灰色である。素地は淡灰色で精良な砂粒の少ない粘土を使用しており、硬質に焼き上がっている。

土師器壇A　半球状の形態のものである。外面をヘラ削りし、内面をナデ調整したc手法のものである(第8図17)。残存状況がわるく、剥離が著しい。他の口縁部片は9片あり、いずれも外面ヘラ削り調整を施している(図版四一62・63・69~71・76)。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。

土師器壺A　平坦な底部から、内彎して開き気味に立ち上がる口縁をもつ(第8図19・20、図版四一19・20)。外面は底部から口縁部までヘラ削りしたもの(19・20、図版四一72)と、ヘラ削りが口縁端部にまで及ばないもの(図版四一73、底部から口縁までヘラ削りの痕を残さないもの(図版四一66~67)がある。前二者より後一者の方が明らかに古く、後一者は古墳時代終末期、飛鳥時代に入るものであろう。口縁端部は、いずれも内側に巻き込むように肥厚している。

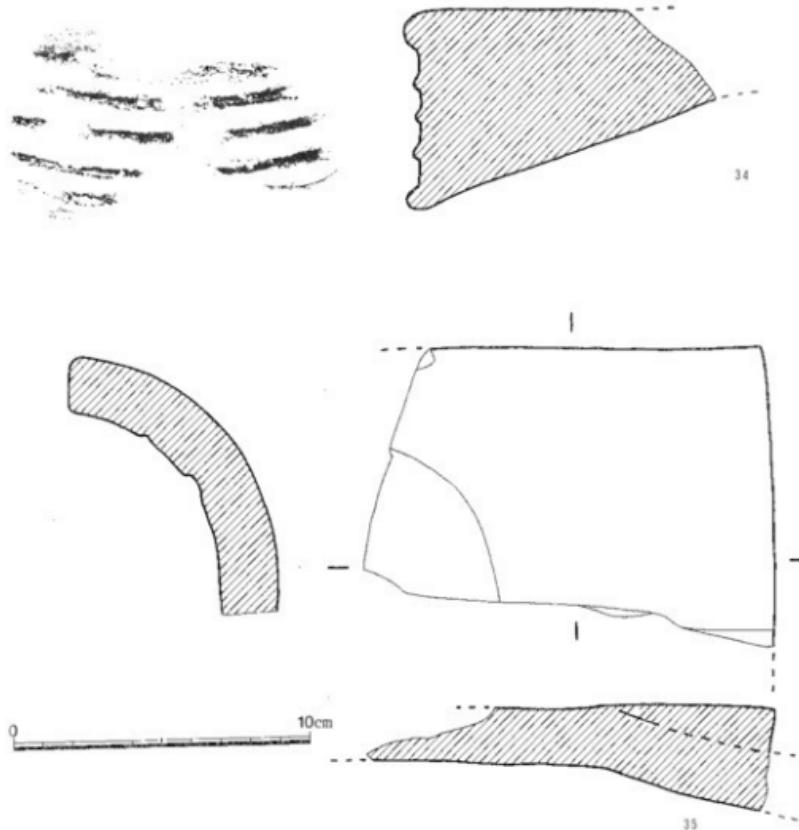
土師器皿A　平坦な底部から、内彎しながら外傾する短い口縁部をもつ(第8図18、図版四一18・64・68)。外面は、いずれも全面ヘラ削りを施している。口縁端部は、巻き込むように肥厚させているものと、丸くおさめているものがある。

土師器甕　甕は、球形に近い体部に外反する口縁をもつものである。口縁を短く上方に立ち上がらせ、端部を平坦にしたもの(甕A=第8図22、図版四一22)と、端部を内側に丸く巻き込むように肥厚させたもの(甕B=第8図21、図版四一74・75、図版五一21・79・80)の他、單に丸くおさめたもの(図版五一78・81・82)がある。また、端部を丸くおさめたものには、口縁部が長く大きく開くもの(甕C=82)と直立に近く伸びるもの(甕D=78)、さらに短く、短頭壺のような口縁形をするもの(甕E=81)がある。甕Aは、口縁が短く、体部の内外面から口縁にいたるまで、丁寧なナデ調整が施されている。甕Eも同様であり、口縁端部の処理方法を除けば、形態と手法に共通性が認められる。甕Bは、体部外面肩部に圧痕があり、外面を刷毛、内面をナデ、口縁部内面に刷毛目を残すナデにより調整されているものが多い。甕Cは、残存状況がわるく、調整不明である。また、器壁が厚く、口縁端部を上方へつまみ上げたもの(図版五一

84) もある。

土師器では、これらの他、直線的に大きく開いた唾壺の口縁と思われる緑釉陶器片（第8図23）や、土師器カマドの破片（図版五一-83・85）、黒色土器の細片（図版八一(4)）が出土した。

瓦類 瓦には、丸瓦、平瓦、軒平瓦等がある。平瓦は総破片数48点、丸瓦の総破片数は15点であり、平瓦の方が多い。平瓦は、凹面布目、凸面繩目のものが47点あり、残る1点は格子目叩きによる（図版五一-86）。繩目叩きによる平瓦のうち、凹凸両面をナデ調整したものは7点、ナデ調整を施さないものは9点であり、他は調整不明である。前者には、繩目叩きを施した凸面に砂粒が多く付着したものが目立ち、後者には、赤色粒子や黒色粒子を多く含むが精良な粘土を用いたものがある。丸瓦は、玉縁部が2点ある（第9図35、図版五一-35）。玉縁部の成



第9図 井戸SE2907出土瓦実測図 ($S = 1/2$)

形は、いずれも凸面に粘土を付け加えてなされている。軒平瓦は、難波宮式で、瓦当面は重画文により飾られている(第9図34、図版五一-34)。法量は、厚さ6.4cm、中央弧厚0.5cm、圈内厚1.8cm、圈外厚2.9cm、内区厚4.1cm、上外縁幅1.2cm、下外縁幅1.1cmを測る。額部は直線的に、瓦当部から平瓦部へ薄くなる。

これらの他、土馬の首部片3点(図版六一(2)102~104)と前脚部から首部にかけての破片1点(同33・第8図33)等、数点や、凝灰岩片1点(図版五一-87)が出土した。

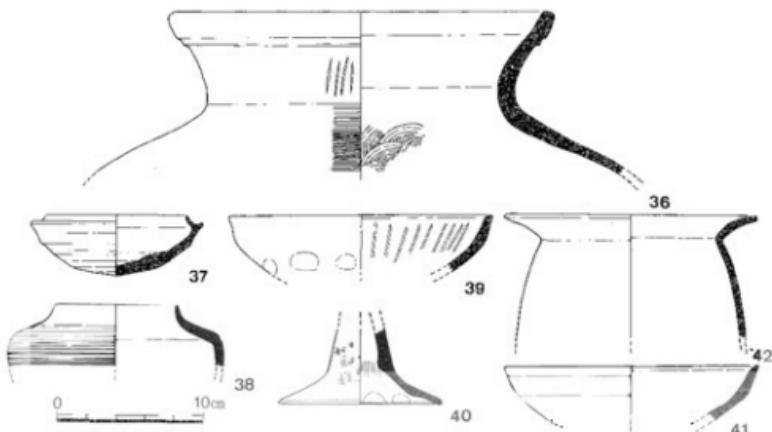
土壤SK2913出土遺物

当土壤からは、須恵器坏身、短頸壺、甕、土師器高坏、甕が出土した(第10図)。土師器の残存状況は悪く、調整手法まで観察できるものは、わずかであった。しかし、6世紀以降8世紀前半にいたるまでの土師器が明らかでない当地域にとっては、重要な成果といえる。

土師器高坏(第10図39~41、図版八一(2)39・40) 高坏には、坏部と脚部の破片があり、特に精良な粘土が用いられている。坏部はいずれも、口縁部を内彎しながら立ち上がり、内傾する端面をもつ。内面には、放射状暗文を施している(39)。脚部は外面に横刷毛を部分的に残すが、丁寧なナデを施している(40)。柱状部内面には、しばり目が認められる。比較的残りのよい39と40は、胎土や焼成状態が同じであることから、同一個体の坏部と脚部である可能性が高い。

土師器甕(第10図42、図版七一-42) 口縁部を水平近くにまで外反させたもので、端部はナデにより平坦面をつくりだしている。体部は長胴になるものと思われる。体部外面は、縱刷毛の整形後、丁寧なナデ調整を施している。口縁部は、内外面とも丁寧な横ナデ調整である。

須恵器坏身(第10図37、図版七一-37、図版八一-108) 坏身は、身部の深いもの(37)と浅



第10図 土壤SK2913出土遺物実測図(S=1/4)

いもの(108)の2点がある。いずれも小型で、受部立ち上がりは短く、端部は丸くおさめている。底面は、ヘラ起こしの痕を残す粗いヘラ削りを行い、身部3分の2以上をナデ調整している。受け部から内面にかけて、全面に丁寧なナデ調整を行っている。

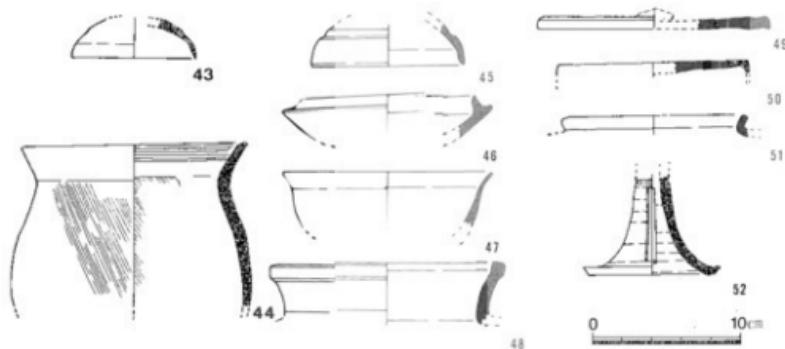
須恵器短頸壺(第10図38) 短頸壺は、肩の張った体部から、なめらかに外反して直立に近く、短く上方へ立つ口縁をもつ。口縁部と体部の境は明瞭でないが、体部の屈曲してなる肩部に凹線を1条めぐらす。

須恵器甕(第10図36、図版七一-36) 大きく張った体部から、内彌してつぼまり、なめらかに外反する頸部をつくる。口縁部は、やや内彌気味で、外面を玉縁状に肥厚させ、その直下に断面三角形の細い凸帯を付す。口縁端部は、ナデにより、やや外傾気味に端面をつくる。頸部の一ヶ所に、ヘラ描きによる4条の縦線の記号を付けている。火表にあたる外面には、自然釉が厚く付着している。体部の外面は、叩き整形の後、カキ目を施している。内面は、同心円からなるあて具痕を青海波としてとどめている。頸部内面に、下弦の半月形のツメ圧痕を数ヶ所に残す。

当土壤は、これらの遺物群から、7世紀前半代、須恵器編年のTK217型式併行期にあたるものと思われる。

溝SD2909出土遺物

当溝からは、土師器のみが出土し、高環と甕の器種がある。高環は2点あり(図版八一-16)、胎土や形態が、先の土壤SK2913と大きく異っている。この高環は、淡灰黄色に焼き上がった、やや目の粗い胎土で作られている。柱状部は太く、内面は丁寧なナデ調整が施されている。この差は、時期差の現われと思われ、土壤SK2913より古いと考えられる。甕(第11図44、図版七一-44)は、体部の内外面に刷毛目を施している。完形に復せないが、長胴化した体部になるものと思われる。口縁部は、やや内彌気味に外傾し、口縁端部は内傾した面に、1条の沈線を巡



第11図 各地区出土遺物実測図(S=1/4)

らす。口縁部内面には横刷毛を施すが、外面はナデ調整で仕上げている。

各地区出土遺物

上記したものの他、溝SD2901からは瓦器片に混入して7世紀の須恵器壺蓋（第11図45、図版七-45）が、土壌SK2917からは同時期の須恵器壺蓋（同図43、同図版43）が、出土している。井戸SE2907の検出面からは灰釉陶器の壺A蓋（同図50）や須恵器壺B蓋（同図49）が出土しており、井戸SE2907に伴う遺物の可能性がある。これら遺構から出土したもの他、中世包含層内から、須恵器の長脚二段透し高杯（同図52、同図版52）や、口縁を肥厚した甕（同図48）、壺身（同図46、同図版46）、等の7世紀代の遺物や、壺A（同図51）や甕（同図47）等の平安時代の遺物等が出土している。瓦器は実測にたえるものはなかったが、13~14世紀のものがある。

5. ま と め

今回の調査は、はじめに述べたように狭小な面積での調査であり、遺構の性格や遺構群としてのまとまり等については明らかにできなかった。しかし、遺物の示す時期は、鎌倉時代、平安時代初期（長岡京期）、平安時代前期、古墳時代後期から飛鳥時代にわたっている。その中心的遺構は、大部分が集落と関連していると思われる。特に、土壌SK2913は、残存状況が悪かったとはいえ、七世紀前半の須恵器と土師器が組み合わせとして捉えることができ、大きな成果と言える。井戸SE2907にしても、井戸の構造は明らかにできなかったが、平安時代前期の遺物群が得られた点、当地域の平安時代を考察する上で貴重な資料となろう。この井戸SE2907出土遺物には、平安時代前期の遺物の他、長岡京期や古墳時代終末期の遺物も含まれていた。

井戸SE2907出土遺物のうち、古墳時代終末期（飛鳥時代）の遺物と思われるものはいずれも小片であり、明らかに混入したものとすることができる（図版五一-78・82等）。しかし、長岡京期としてあつかえる遺物群には、完形に復せるものも少なくない。また、量も平安時代前期の遺物群にひけをとらない。当井戸出土の遺物を、時期別に示したものが、付表一2である。総出土量は付表一3に示した。

このように、總破片数にすれば長岡京期の方が多い傾向があり、これに軒瓦や凝灰岩も長岡京に関連すると考えると、井戸の掘られた時期を長岡京期に求め、埋没時期を平安時代と考えることができる。

注1 奥村清一郎他 「長岡京跡右京第27次発掘調査概要」『京都府概報』1980第2分冊

2 長岡京跡発掘調査研究所 長岡京市教育委員会「長岡京跡右京第29次-7ANGHD地区一現地説明会資料 1980年3月

付表-2 井戸S E2907遺物時期区分表

時期	古墳～飛鳥	長岡京	平安京
土器番号	78 82	1～4	5
		6	7～18
		19～21	
		24	26
		25	28～32
		27	
		33～35	53
		55～59	54
		62～77	60
		79	61
		80	81
		87～90	83～86
		92～97	91
		101～106	98～100
		109	
計	2点	54点	35点
器皿	0	6個体	7個体

付表-3 井戸S E2907出土遺物組成表

土師器 須恵器、綠釉、灰釉陶器

器種・器形		総数
壺皿類	A形態	2
	B形態	3
	C形態	8
壺	B底部	1
	B蓋	1
甕	A形態	3
	B形態	2
	C形態	1
羽	釜	1
カマド		1
高	壺	2
土	馬	2

土師器

肉眼による胎土分類		
I群	—	34
II群	—	18
III群	—	29
IV群	—	32
V群	—	19
VI群	—	71
VII群	—	331
VIII群	—	41(点)

瓦類

	繩目	格子目
平瓦	47	1
丸瓦	15	0
軒瓦	1	0

器種	器形	総数	備考
壺	A	4	
	B	9	
	口縁部	11	
甕	C形底	3	ヘラ記号「×」1 緑釉1
	B形底	2	
皿	C形底	3	ヘラ記号「 」1
	B形底	2	ヘラ記号「 」1
壺皿	口縁部	13	
壺	B蓋	14	
高壺	脚部	1	
壺	A形底	大2 小1	
	B形底	大3 小2	
壺	口縁部	2	
L	体部	7	
	底部	3	
壺G	体部	2	
壺A	口縁部	2	灰釉1
壺N	肩部	1	灰釉1
平瓶		1	灰釉1
甕	A形口	1	
	B形口	1	
円面硯		1	灰釉1
唾壺		1	緑釉1

※数字は總破片数を示す。(細片を含む)

第2章 長岡京跡右京第48次調査概要

長岡京跡右京二条三坊十六町

上里遺跡

第2章 長岡京跡右京第48次(7 ANGNC—2地区)調査概要 —右京二条三坊十六町・上里遺跡(西ノ口地点)—

1. はじめに

- 1 本報告は、1980年9月12日から同年10月14日までの間、長岡市井ノ内西ノ口16において実施した調査に関するものである。当調査地は、長岡京跡右京二条三坊十六町の推定地であり、また上里遺跡にも含まれる。
(注1)
- 2 当調査は、㈱東映不動産の宅地開発に伴う事前発掘調査として実施した。調査部分は、対象地の道路新設部分に限り、南北幅2.8m、東西長さ31.5mの長方形トレーニングを設定した。この結果、88.2m²の調査面積となった。
- 3 調査は、長岡市教育委員会が主体となり、長岡京跡発掘調査研究所に委託して行った。現地調査は、当時長岡市教育委員会嘱託岩崎誠（現在、財団法人長岡市埋蔵文化財センター調査員）が担当した。
- 4 本報告については、火山灰に関連して橋本清一氏に御寄稿いただいた他、写真と原稿を岩崎が担当し、挿図は白川成明が担当した。
(2)



第12図 発掘調査地位置図 (S=1/5000)

2. 調査経過

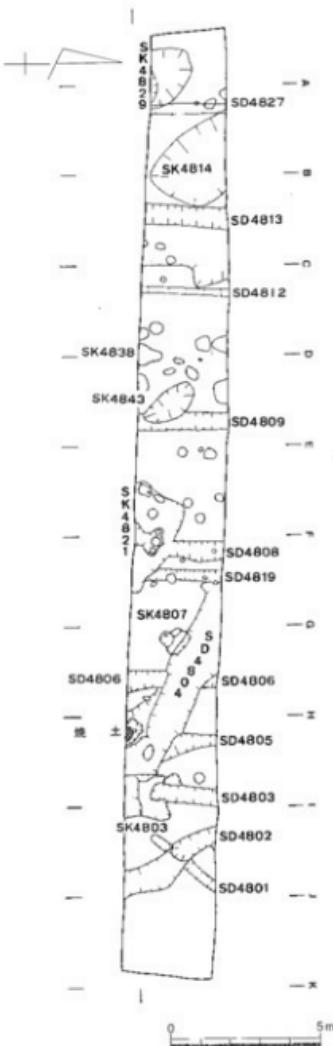
当調査地は、井ノ内の段丘上にあり、現在の井ノ内集落の北西端に位置する。小字名を「西ノ口」といい、井ノ内集落の西端という位置関係と付合する。対象地の西に接して、市道3003号線が南北にはしり、南約30mの位置には、東西方向

の府道向日善峰線がある（第12図）。後者の道路は、西国街道からの枝道であり、井ノ内集落を通過して大原野善峰寺に至る。通称善峰参道でもある。このように、当調査地は、古道の近隣にあるうえ、地名から、井ノ内集落の西の入口にあたることから、これに関連して、中世井ノ内村の一画が明らかにできる可能性を秘めていた。また、長岡京跡右京第22・⁽³⁾25次調査（7 ANGTE地区）や、同右京第27次調査（7 ANGHD・GNC地区）等で、長岡京跡はもちろんのこと、縄文時代から平安時代、あるいは鎌倉時代にまで及ぶ重複した遺跡（上里遺跡）にも含まれていることが明らかとなっている。

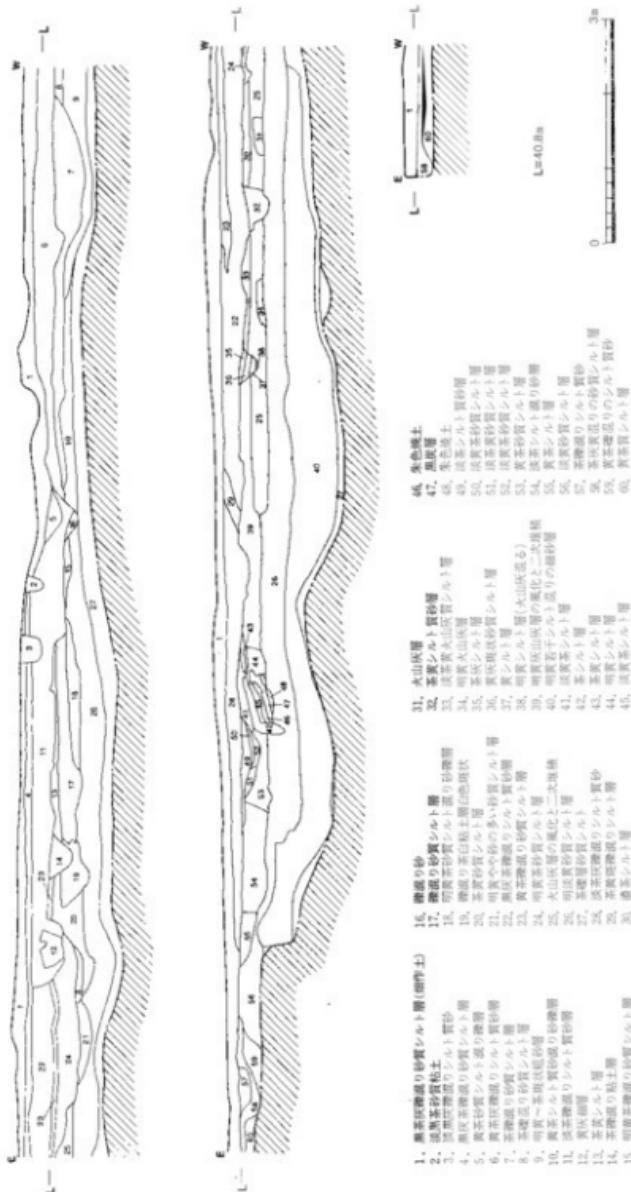
以上の遺跡内容に関連して、上・下水道管等の埋設工事により破壊される可能性のある部分について、調査を行うことになった。従って、トレンチ設定位は、おのずと新設道路予定位置に定まり、南北幅2.8m、東西長さ31.5mという細長いトレンチとなつた。宅地部分については、木造であるため基礎工事等で掘削され、遺跡破壊されることがないと判断から、今回の調査位置から除外された。

調査地内は畠地であり、遺構面は浅いと思われたが、調査期間の短縮と経費節約のため、重機により耕土を除去し、以下を人手により、調査を始めた。

当調査地の割り付けは、原点を0とし、トレンチ内を南北方向にA～K、東西方向に1～2を設定して方眼に区切った。地区名は、北東交点名で示した。尚、A2点はX=-117,556.200、Y=-28,433.800で、国土座標の方位により割り付けた（第13図）。



第13図 遺構配置図 (S=1/200)



第14図 堆積土層図 (S = 1/80)

3. 検出遺構

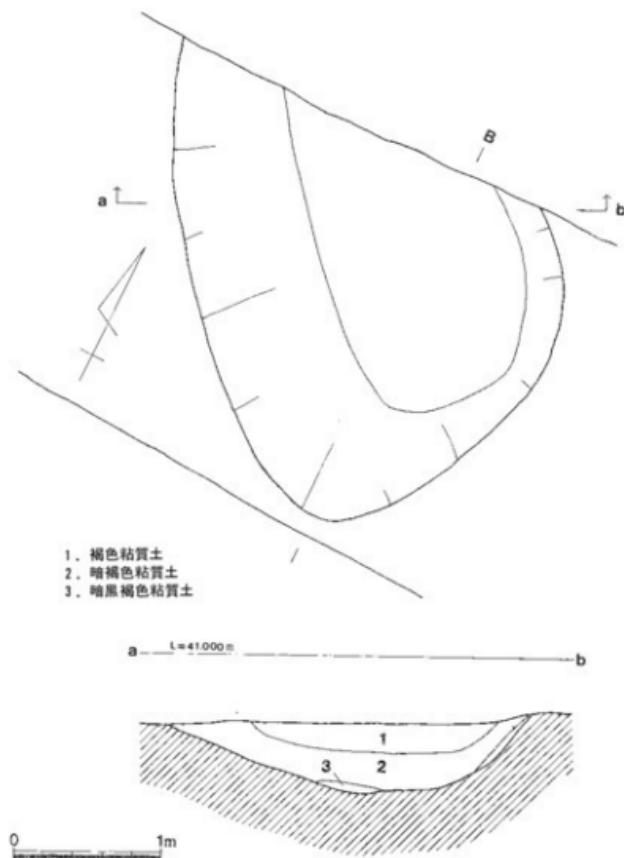
当調査では、江戸時代の遺構が最も新しく、安土桃山時代、鎌倉時代、古墳時代、弥生時代の6時代にわたる遺構が検出された。これらの遺構の中には、前後関係の明らかなものもある。これらの遺構検出面は、ほとんどが地山層の上面である。一部に中世包含層が認められ、近・現代の遺構は、これを削って掘られていた。

江戸時代の遺構

溝SD4802は、近世遺物を伴う遺構で、江戸時代のものと思われる。埋土は1層で、北西—南東方向に蛇行して伸びる。幅0.9m、深さ0.2mを測り、3.6m間を検出した。土師器皿や京焼、伊万里焼等から、18世紀頃と思われる。

安土桃山時代の遺構

当時期の遺構には、土壤SK4807と溝SD4805がある。前者は、弥生時代の溝を掘りこんでいる。一辺0.9mの方形平面形で、深さ0.1mを測る。後者はほぼ南北方向で、北から南に向って幅広くなる。こ

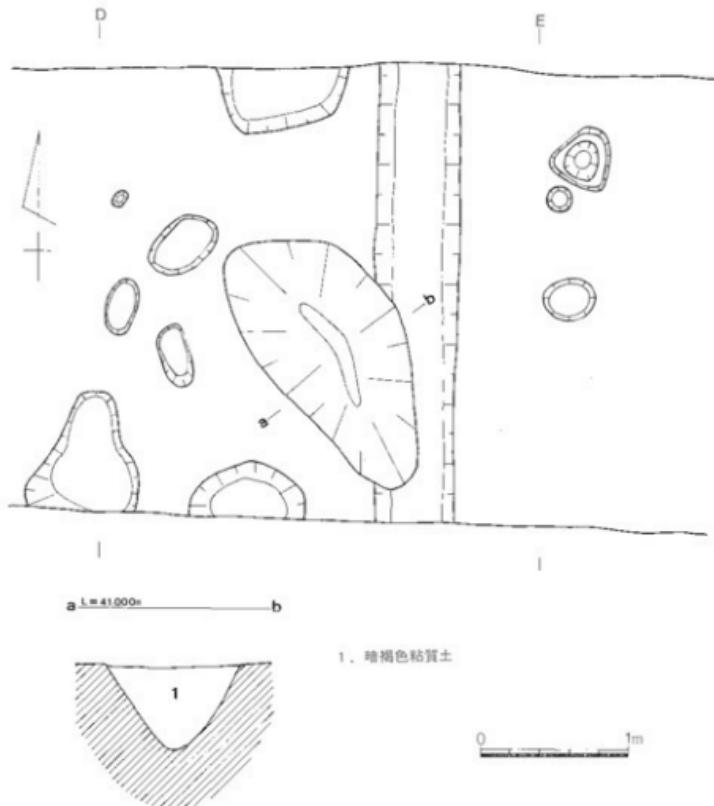


第15図 土壤SK4814実測図 (S = 1 / 40)

の規模は、幅0.4~2.9m、深さ0.5mを測る。この両遺構からは、土師器皿や丹波焼雷鉢等が出土し、16世紀後半と考えられる。

鎌倉時代の遺構

この時期の遺構には、多くの溝や土壙がある。溝は、南北方向にあるもの（SD4806・08・09・13・19）が多く、やや東にふれたもの（SD4803）もある。いずれも埋土は1層からなり各溝の幅は、0.5m前後のものが多く、中には幅約0.2mのものもある。深さは、おおむね0.5~0.3mであった。各溝の間隔は等間でない。土壙は、SK4814（第15図）が最も大きく、短径約2.5m、長径3m以上の橢円形になると思われるもので、南半部を検出した。埋土は3層からなり、深さ0.4m以上を測る。土壙SK4829も橢円形になるものと思われ、その北半部を検出した。短径2m、



第16図 土壙SK4843実測図 (S = 1 / 40)

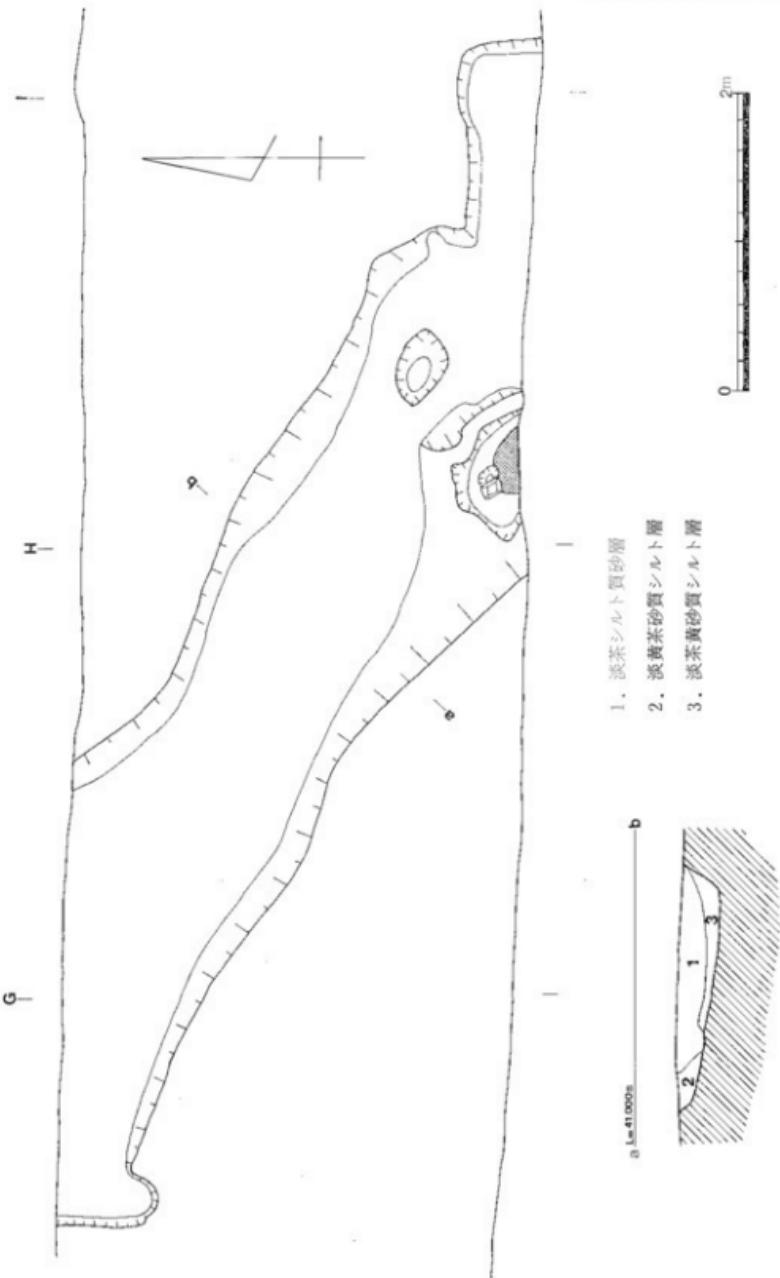
深さ0.1mを測り、長径2.5m以上であろう。埋土は1層からなる。土壙SK4843(第16図)も、埋土は1層であり、その土質から、前記土壙と同時と思われる。平面形は不整橢円形で、長径0.2m、短径0.8m、深さ0.5mを測る。これら3つの土壙は、いずれも長軸を北西—南東方向に向けている。この他、小土壙や柱穴状遺構等があり、そのほとんどの遺構埋土から、小片ながら、瓦器塊、皿、羽釜、鍋などが出土した。細片しかない遺構や、遺物を出土しなかったものもあるが、中世包含層出土遺物等から見て、13世紀後半から14世紀の遺構群と思われる。

古墳時代の遺構

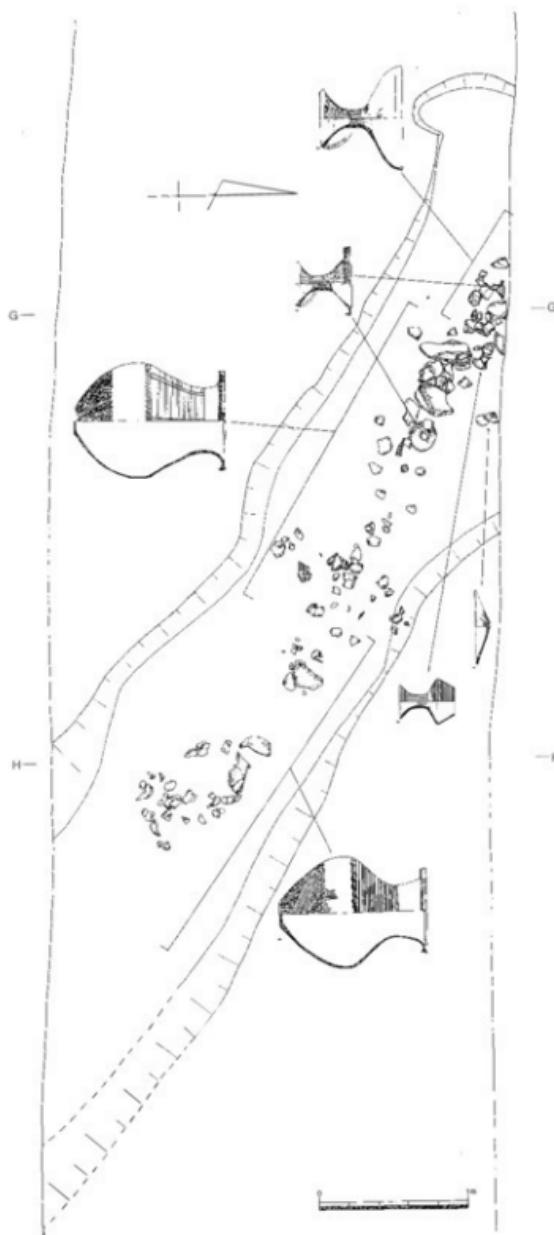
当時代の遺構には、土壙と柱穴状遺構があり、性格の明らかでない焼土層もこの時期のものと思われる。土壙には、いびつな方形をなすものが2例あり、そのひとつ(SK4803)は、短辺1.5m、深さ0.7mを測る。南辺は検出できなかったが、長方形に近い平面形になるものであろう。他の一例(SK4821)は、方形になると思われるもので、北東側の一辺は約3mを測り、深さ0.1mであった。南半分は、トレンチ外になる。焼土層は、この土壙の北西側の一辺にそったトレンチ南壁よりに検出された。焼土層は、不整円形の平面形をなし、面として検出された。この焼土層が土壙としたSK4821に伴うものならば、当土壙は、竪穴住居址と捉えた方がよいかとも知れない。南半部が追求できず、残念である。柱穴状遺構は、中世のものより黒色気味の埋土をもつもので、P4822・23・25・26・33・37等がある。いずれの遺構からも、7世紀代の遺物群が少量出土した。

弥生時代の遺構

当時代のものには、溝と土壙がある。溝SD4804(第17図)は、北西—南東方向の溝であり、幅約1.2m、深さ0.3mを測る。埋土は3層からなり、遺物は主に第3層から出土した。遺物の出土状況は、破片が溝底に散乱した状態であった。しかし、ほとんどが原形に復することができ、各接合破片の出土位置は接近していた。一個体の破片分布範囲も限られていた(第18図)。また土器に混じって人頭大の石数個があった。これらの石は、全て土器片の上に乗っており、しかも、土器片と接していた。このことから、土器が溝内に投棄された直後、あるいは、溝内に転落した直後に大石が投げ入れられたか、または、落ち込んだものと察せられる。小型土器類の出土状況を見ると、高坏のひとつに脚部と坏部が各々分かれて、各部位の形をとどめたまま埋没していた。他の高坏では、横転したままの形で検出された。これらの出土状況から、投棄されたと考えるより、転げ落ちたと見る方が自然である。また、土器を多く出土した第3層の堆積が、溝底の東よりに厚く、西よりに薄いことから、東側からの流れ込みによる堆積土と判断できる。従って、出土土器群も、第3層とともに溝内へ流れ込んだものと判断できる。このようなことから、当溝は、掘られた当時は空堀状であり、何らかを区画する目的があったと思われる。さらに、その区画位置は当溝の東側であり、ある程度の盛土が築かれ、いくつかの土器が置かれていたと洞察できる。当溝の追求調査ができなかったため、その性格を確定すること



第17図 溝SD4804実測図 (S=1/40)



第18図 溝SD4804遺物出土状況実測図 (S=1/40)

は困難であるが、現段階では、方形周溝墓の一端ではないかと考えている。

土壤SK4838は、不整形なもので、直径0.7mの円形に北側を張り出した形状である。深さ0.3mを測る。南半部は検出できなかった。当遺構の性格は明らかでない。

これら弥生時代の遺構からは、凹線文で飾られた土器が出土し、中期後半の遺構群であることが知られる。

4. 出土遺物

当調査で出土した遺物は須恵器・土師器・瓦器・弥生土器等の他、近世陶磁器や鉄クギなどがある。特に弥生土器は、溝SD4804から一括出土し、良好な資料が得られた。他の遺物は細片が多く、図化することができるのは限られていた。細片については、図版写真で紹介するにとどめ、以下、古い時代の遺物から時期を追って記述することにする。記述内容に精粗の差が生じるのは、一括出土の量や残存状況によるためである。

弥生時代の遺物

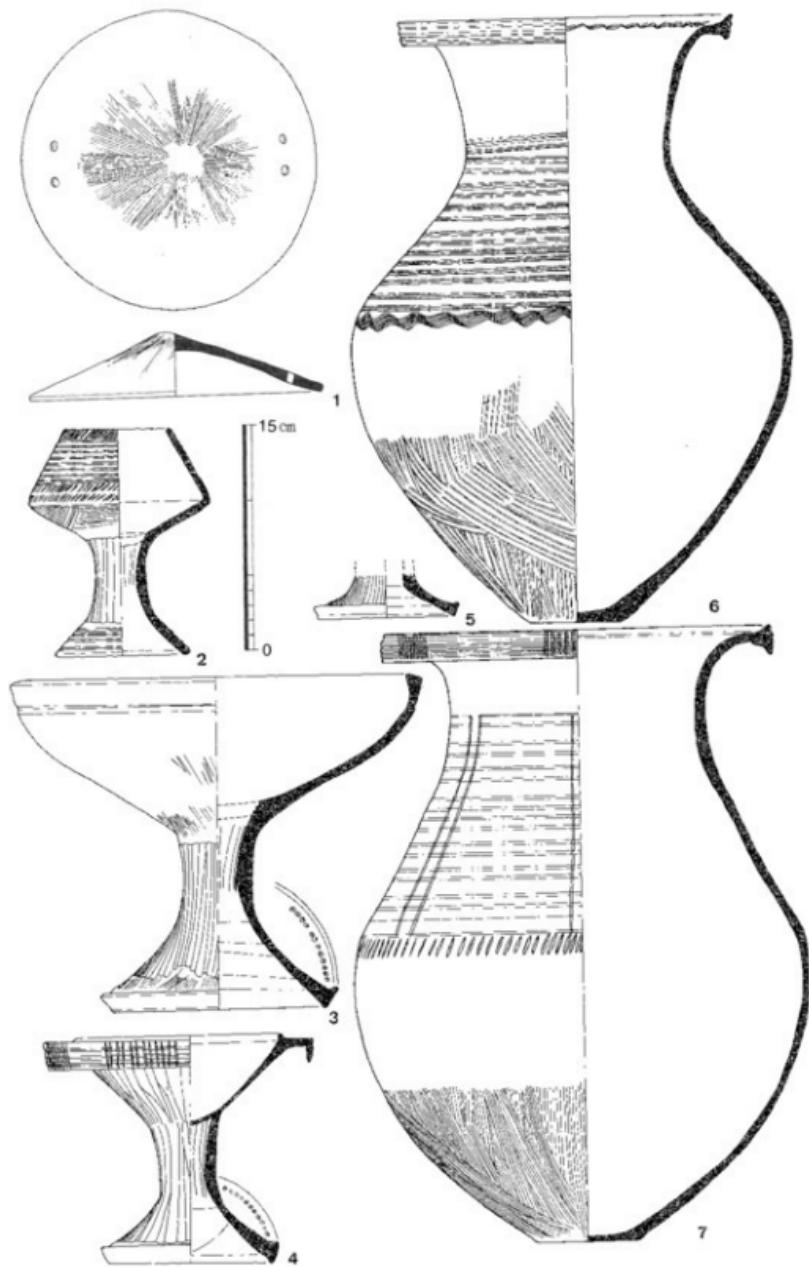
溝SD4804出土弥生土器 当溝からは、少ない個体数ながら、器形に富んだ土器群が出土した。この土器群は、当溝の埋土堆積状況や、土器の出土状況等から、同一時期の一括資料としてあつかえるものと思われる。器種組成からみると、壺及び壺用蓋と高環の三種であり、壺や鉢などの煮沸形態などは皆無であった。また、石器も伴わなかった。このことは、溝SD4804の性格を考慮する上でも重要な要素となろう。以下器形と施文及び調整等の各個の特徴を見る。

壺A (第19図6・7) 球形又は倒立卵形の体部に、なめらかに外彫する頸部から水平近くに外反する口縁部をもつ。口縁端部は、上下に拡張し、外面に凹線文を配している。底部は平底で、比較的薄くつくられている。体部下半から底部にかけて刷毛目を残し、これより上から口縁部にかけて、丁寧なナデ調整を施している。体部外面には頸部から体部最大径の位置までの間には、櫛描き直線文帯の下端に波状文を施すもの(6)と、半截竹管による直線文に縦線文を加えた文様帶の下端に櫛描き刺突文をめぐらすもの(7)がある。前者の口縁部内面には、櫛描き波状文が施されている。後者は、口縁部外面の凹線文の上から7~8条のヘラ描縦線文を、口縁円周の4~5ヶ所に施されている。胎土は、前者にはやや砂粒が多く含み、黄褐色に焼き上がっている。後者の胎土は、砂粒が少なく良質の粘土が使われており、灰黄褐色に焼き上がっている。

高環A (第19図3) 高環には3形態があり、そのうち、環部の口縁形が内彫しているものをA類とする。環部の口縁下端には、凹線文を1条巡らしている。口縁端部は、やや外傾気味に平坦面をつくり出している。環部外面は縦刷毛整形した後、丁寧なミガキ調整を施している。脚部は環部からなめらかに細まって柱状部となり、外反しながら裾部にいたる。脚端部は外面を上方につまみ上げて平坦面をつくり出している。裾部下端には、円形竹管による刺突文を1帯めぐらしている。脚部外面は縦方向のヘラミガキ調整を施しているが、裾部下端に刷毛目整形痕をとどめている。柱状部の内面では調整せず、しづり目を残すが、裾部内面は、横方向にヘラ削りを施している。端部は丁寧な横ナデ調整を施している。環部と脚部の接合は、円板充填技法によっている。

高環B (第19図4) 内彫する環部に外反して水平面をつくり、さらに下方に垂下する口縁部をもつもので、水平面の内側に凸帶を1条巡らす。この形態の高環には、垂下した口縁部外面に凹線文を施し、ヘラ描き縦線文を4~5ヶ所に描いたもの(4)と、同所を無文のまま丁寧にヘラ磨きを施すもの(図版一三一-30)がある。前者は、脚部の形態・調整・施文に高環Aと共に通した特徴があり、口縁部の文様構成は壺A(7)と共通している。また、この三者は、胎土にも共通性が認められる。後者は、環部上半から口縁部にかけての破片であるため、脚部は明らかでない。しかし、胎土は砂粒の少ない良質の粘土を用いており、前者と共に通している。

高環C (第19図2) なめらかに裾を広げた脚部に、外反した後屈曲して直線的に内傾する



第19図 溝SD4804出土遺物実測図 (S= 1 / 4)

坏部をもつものである(2)。外面は全面に丁寧なヘラ磨きを施している。脚柱状部内面にはしばり目が残るが、裾部内面は丁寧なナデ調整を施している。坏部内面も、丁寧なナデ調整を施している。脚部下半から端部にかけての外面には、4条の凹線文を施す。直線的に内傾する坏部外面では、全面に施文している。坏部の文様構成は、8条の凹線文帯の上下に櫛描き列点文を配するもので、列点文は、口縁端部に1帯、坏部底の屈曲部側に2帯をほどこしている。器壁は平均した厚さにつくられており、坏部と脚部の接合は、円板充填技法によっている。口縁端部と脚端部は、丸くおさめられている。

壺用蓋 (第19図1) 笠状をした円錐形のもので、縁辺に2孔一対の小円形紐孔をもつ。天井部下半から内面にかけて丁寧なミガキが施されているが、天井部上半には、頂部から放射状に刷毛目が残る。端部には平坦面を持ち、丁寧な横ナデ調整が施されている。

これらの他、脚部片 (第19図5) や壺の口縁部片が少量ある。前者は、柱状部から大きく外反した裾部をつくり、端部は上方につまみ上げて内傾する面をつくり出している。外面はヘラミガキを施し、内面は横方向にヘラ削りを施している。端部は、丁寧な横ナデ調整を行っている。後者は、壺Aの口縁部片で、端部を上下に拡張して、外面に凹線文を施している。⁽⁵⁾

これらの遺物群は、凹線文の多用という点で、神足遺跡の溝SD1055や今里遺跡の川SD0732出土遺物群の中に、共通したものを見いだせる。また、この特徴は、畿内第IV様式として捉えることができる。細部についてみると、高坏C(2)には凹線文を幅広く配しており、壺Aの体部に施された文様帶が頸部から体部最大径にまでおよんでいる。このように、装飾性に富んでいくことから、IV様式でも前半期に考えられる。形態には、壺A、高坏A・Bなど、当地域に一般的に見られるものや、非常に稀な高坏C等があり、また、壺用蓋は、同時期の在地産のものは本例が初見である。文様構成の面から見ると、壺A(6)のように、体部上半に単体構成の櫛描き直線文を多条に施し、その最下段に波状文を1帯めぐらすものは、当地域の畿内第II様式段階から認められる。また、壺A(7)のように、体部上半に半截竹管による直線文を多条に施し、さらに同じ原体で縦線文を配して幅広い文様帶を構成し、その下に櫛描き刺突文を1帯配するものは、神足遺跡などにもある。高坏Bや壺Aの口縁部を、凹線文とヘラ描き縦線文で飾るものは、神足遺跡や今里遺跡、中久世遺跡など、当方でも頻繁にみうけられる。このようなことから、当遺構出土の弥生土器は、乙訓地域に一般的に普及した土器群であり、しかも單一時期の一括資料として捉えうるものと考えることができる。

古墳時代の遺物

古墳時代のものは、須恵器と土師器がある。須恵器は、溝SD4808出土坏蓋 (第20図8) と同時期のものである。他に、溝SD4833からは、内傾する立ち上がりをもつ坏身 (図版一三一-28) や、叩き技法による甕体部片等が出土した。土師器は、長胴の甕や土壙SK4821出土の坏 (第20図9) 等がある。いずれも細片で、残存状況もよくない。この時期の遺物は、中世遺構や包含

層からも少量出土している。図版一三一27は、土壤SK4824から出土した同時期の甕頸部片である。また、須恵質の埴輪片も一点ある(図版一三一29)。

平安時代の遺物

平安時代の遺物は、中世遺構や包含層から細片が少量得られた。主なものは、須恵器の壺底部片(第20図11)や無釉陶器の壺・皿などである。土師器は明らかでない。無釉陶器の壺には、口縁部と体部の境がわずかに屈曲し、内面の口縁部側を厚くして段をつくるものがある。底部片には、削り出しの輪高台と蛇ノ目高台(図版一三一26)がある。いずれも、近隣地域産のものである。緑釉を施釉した完成品は出土しなかった。緑釉陶器より無釉陶器の消費率が多いことは、長岡京跡右京第29次調査で検出された井戸SE2907の統計と同一傾向にある。

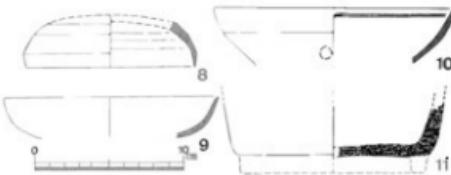
中・近世の遺物

中・近世の遺物は、溝や土壤・柱穴状遺構などから出土した。遺物には、瓦器、土師器、陶磁器等がある。瓦器には、壺(第20図10)、羽釜、鍋などがある。壺は、口縁端部内面側に1条の沈線を巡らすもので、内面に粗い暗文が施されたものが多い。口径14~15cmのものが多く、13世紀代に比定できる。この瓦器類に伴うものとして、土師器皿や須恵器片口鉢も少量出土した。

近世遺物には、溝SD4802から出土した伊万里、京焼等の陶磁器や、土師器皿(図版一三一13~18)、土壤SK4807出土丹波焼(図版一三一12)などがある。まだ、自然のものか人間の手が加わったか明らかでないが、紫水晶の小片が一点、溝SD4802から出土している(図版一三一17)。

5. まとめ

当調査では、遺物は弥生時代から江戸時代にいたるまでの土器類が出土したが、遺構は、弥生時代中期や古墳時代終末期、鎌倉時代、安土桃山時代、江戸時代のものがあった。中でも、弥生時代に関しては、大きな成果が得られた。しかし、地名に残る「西ノ口」や長岡京跡に関連するものは、明らかにすることができなかった。調査の最終段階で地山層の断ち割りを行った結果、火山灰層が確認され、地質に関する成果も得られた。この地質に関しては、橋本清一氏(現・財團法人京都府埋蔵文化財センター調査員、府立山城郷土資料館出向)に現地調査の参加をお願いし、土層・土質の観察を入念にしていただいた。この結果、火山灰層を確認することができたので、同氏に、観察結果とともに、当所で検出された意義や位置付けについて御寄稿いただいた。



第20図 各遺構出土遺物実測図(1/4)

ここでは、火山灰に関する橋本氏の御寄稿と、当調査での大きな成果といえる弥生土器の一括資料についてまとめておきたい。

(1) 弥生土器について

当所からは、溝SD4804から一括して出土した土器群がある。この土器群は、高坏の1点を除き、全ての器形に凹線文が施されており、畿内第IV様式として捉えることができる。また、京都盆地西城の桂川右岸にある同時期の土器群を出土する遺跡は、今里遺跡の溝SD2615、川SD07⁽⁷⁾ 32や、神足遺跡の溝SD1055、竪穴住居SH2801、中久世遺跡などがある。しかし、今里遺跡の川からは、凹線文をもたず、櫛描文で飾るものが多い統計結果が示されており、形態的に古い特徴をもつものも含まれていた。神足遺跡の溝や竪穴住居からは、凹線文を多用する土器群が多く出土しており、当調査で検出された溝の出土遺物群との共通性が認められる。個体ごとの共通性をみると、第19図7の壺Aに描かれた施文構成は、神足遺跡溝SD1055等でも伴出している。櫛描直線文を多条に施し、最下段に波状文を加える文様構成は、雲宮遺跡古市森本地点の溝SD1707や神足遺跡等、中期前葉段階から一般に認められるものである。当地域では、本調査出土例（第19図6）にあるように、口縁部の凹線文と組み合わせることによって中期後葉にまで引き継がれた文様構成と言える。壺Aの形態は、畿内第II様式に比較して、口縁部を凹線文で飾るために端部が上下に拡張され、幅広い面をもつ点が大きく異なる。しかし、全体のプロポーションは畿内第III様式とさほど変化していない。壺Aの口縁部内面に櫛描文を配するものは、畿内第III様式から多くなる傾向にあると思われるが、当地域の第III様式が明確でなく、詳細は明らかでない。この櫛描文には、波状文や列点文、扇形文等が多く、凹線文と組み合せたものは、神足遺跡溝SD1055や今里遺跡川SD0732、溝SD2615等、一般によく見られる装飾である。高坏Bは、神足遺跡溝SD1055でも口縁部に凹線文をもつものと、ヘラミガキで平坦に仕上げたものが共伴しており、当地域に一般的なありかたと思われる。このようなことから、当地点出土弥生土器は、畿内第IV様式の単純資料であり、しかも、当地域の基準資料となりうるものと言える。

（岩崎 誠）

(2) 長岡京市井ノ内付近の段丘のガラス質火山灰層

第14図の土層断面図にしめされている火山灰層は、標高約40mの中・低位段丘上に降灰したもので、本地点では降灰後に細粒物質の急速な被覆によってやや厚く埋没するような堆積によって保存条件が良いために、現在まで残ったと考えられる。

この火山灰層は、厚さ20~30cmの淡黄色を呈するやや均一な磨砂質の細~中粒のやや粗い粒度のガラス質火山灰層であり、その火山ガラスを分析すると、bubble wall型で無色透明だが若干黄色がかったり、平板状を呈し、走査型電顕でみると、表面に微細な泡の跡や内部にチューブ状の気泡の抜けた跡がみられ、その屈折率は1.498前後の測定値を得た。火山ガラスは、室温程度で自然乾燥を充分行ったものを屈折率の測定に使用した。

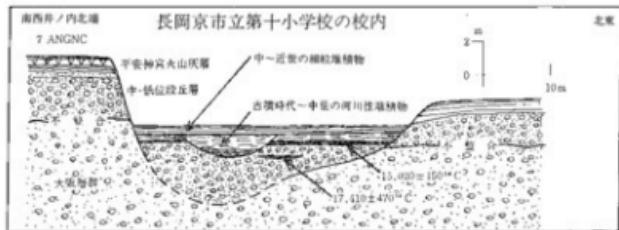
これと同じ火山灰層は、松尾の南の地蔵院前の段丘疊層中の火山灰層や岡崎付近の火山灰層であり、野外の産状や火山ガラス等の性質は同じであり、「平安神宮火山灰層」とよばれており、また高槻市大藏寺の低位段丘層中の火山灰層とも同一と考えられている。この火山灰層は、21,000～26,000年前の間の年代測定値が得られている。また、前後の地層から寒冷な気候をしめす植物群の存在が知られている。

本地点の火山灰層は、「平安神宮火山灰層」に相当すると考えられる。町田・新井氏による始良Tn火山灰に相当するものかもしれない。

本地点の平安神宮火山灰層をはさむ段丘層上部の細粒のシルト層と中・下部の疊層との間の時間的間隙の程度がよくわからない。この井ノ内の中・低位段丘上面より1～4m下に位置する近くの長岡第十小学校では、疊層中に有機質粘土層がはさまれており、大型植物遺体と花粉分析から寒冷な気候が推定されており、その¹⁴C年代は、上位が15,020±150、下位が17,410±470の値が得られている。深泥池団体研究グループにより、井ノ内付近では図のような概念図が考えられている（第21図）。

井ノ内の平安神宮火山灰層や長岡市立長岡第十小学校の疊層中の大型植物遺体・花粉・¹⁴C年代は、この付近におけるウルム氷期における自然の復原や、旧石器との層位関係を知るうえで一つの重要な資料となるだろう。

（橋本清一）



第21図 長岡市井ノ内～第十小学校模式断面図（深泥池団体研究グループ）

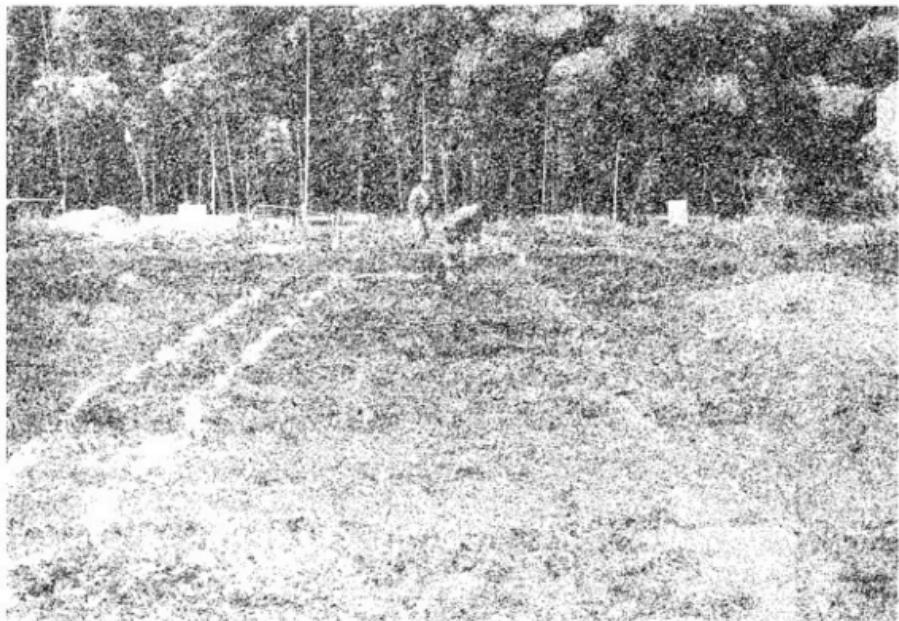
注1 かつて西ノ口遺跡として提示したことがあるが、上里遺跡の一部と改め、弥生時代に限定して西ノ口地点と称することにする。

2 当報告書作成に関し、財団法人長岡市埋蔵文化財センターに、多大な協力を賜わった。また、同センターの白川成明氏には、遺物実測等も担当していただき、遺物の復原には、同センター整理員の小田昌子、大久保泰江、田中佐知子の各氏に御尽力いただいた。記して感謝したい。

3 長岡市立長岡第十小学校建設に伴い行われた調査である。縄文時代後期、弥生時代前期、古墳時代中期から後期、長岡京期、平安時代の各遺構、遺物が検出、出土している。

- 4 奥村清一郎他「長岡京跡右京第27次発掘調査概要」『京都府概報』1980年
- 5 山本輝雄他「長岡第九小学校建設にともなう発掘調査概要」『長岡京市報告書』第5冊1980年
- 6 高橋美久二・吉岡博之他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」『京都府概報』1980年
- 7 注6と同じ
- 8 注5と同じ
- 9 上村和直 「中久世遺跡発掘調査概報」昭和61年度 京都市文觀 (財) 京都市埋文研
久世康博 「中久世遺跡発掘調査概報」昭和56年度 京都市文觀 (財) 京都市埋文研
梅川光隆 「大蔵遺跡」1972 六勝寺研究会 1973年
- 10 岩崎 誠 「(仮)古市保育所建設にともなう発掘調査概要」『長岡京市報告書』第5冊 1980年

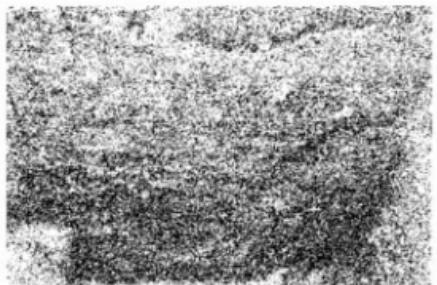
図 版



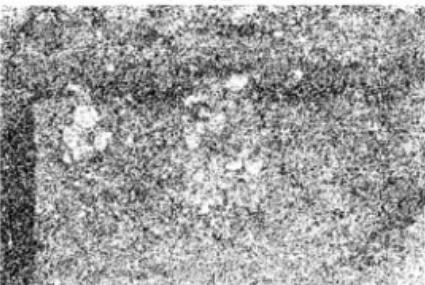
(1) 調査前風景（東から）



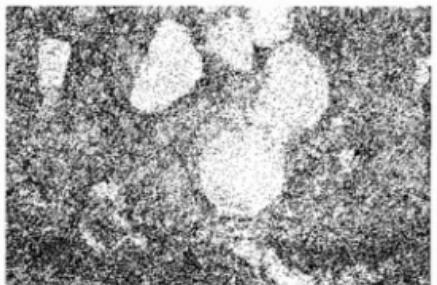
(2) トレンチ発見（西から）



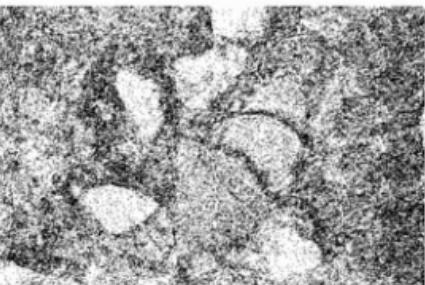
(1) 井戸 S E2907断面



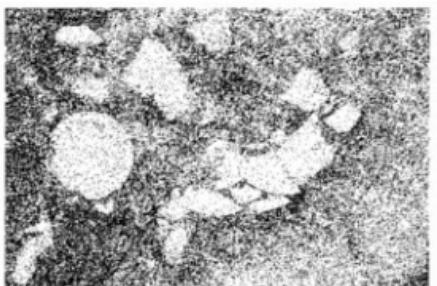
(2) 井戸 S E2907第1層遺物出土状況



(3) 井戸 S E2907第1層遺物出土状況



(4) 井戸 S E2907第1層遺物出土状況



(5) 井戸 S E2907第2層遺物出土状況



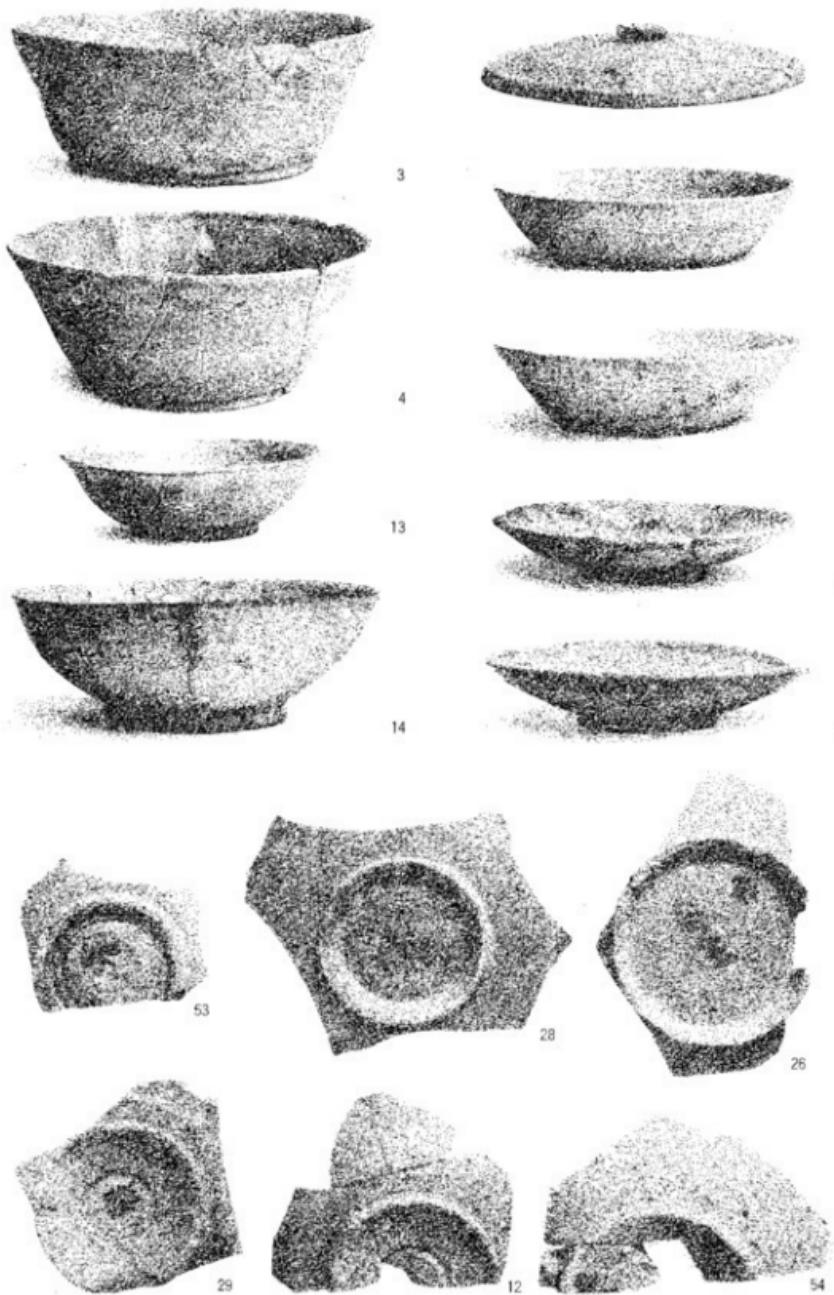
(6) 井戸 S E2907第2層遺物出土状況



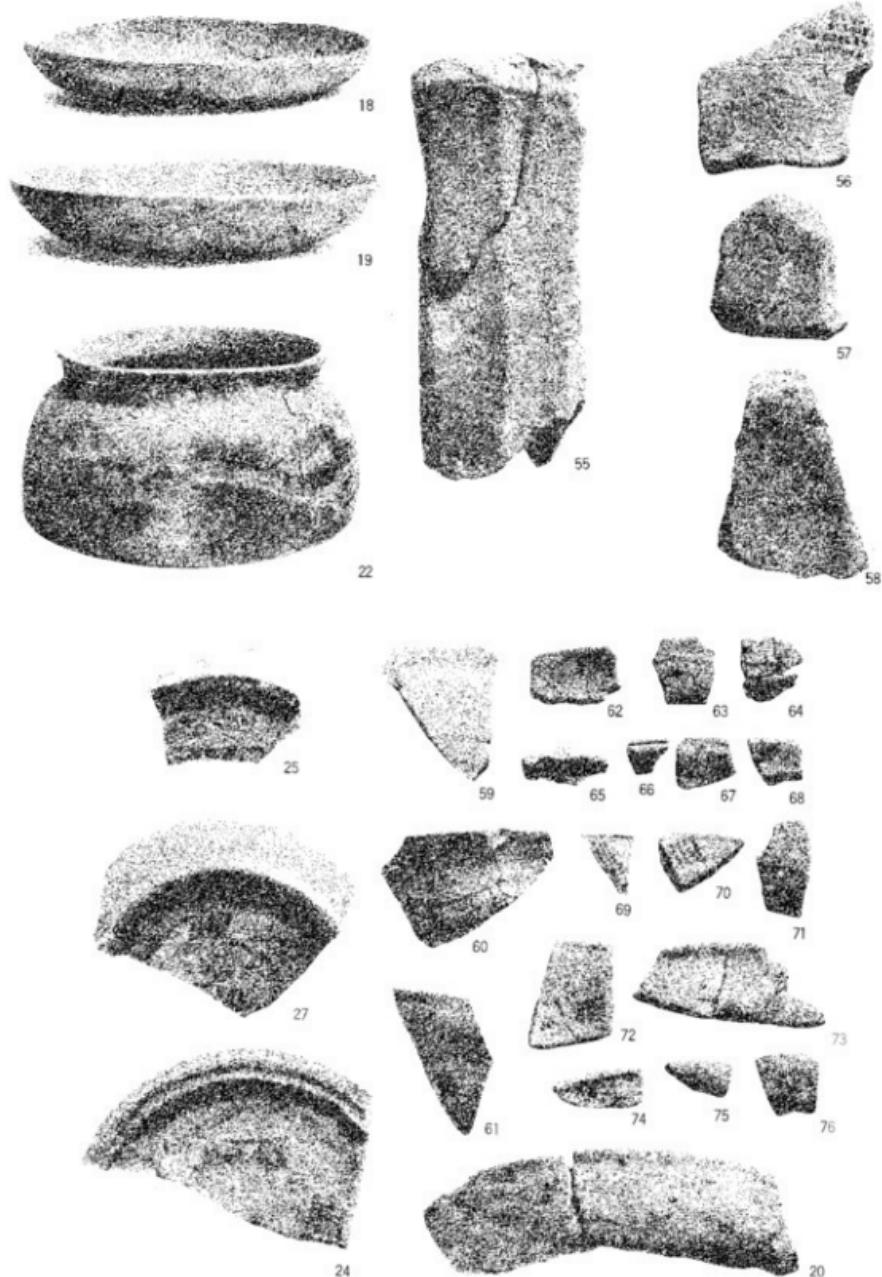
(7) 溝 S D2909全景



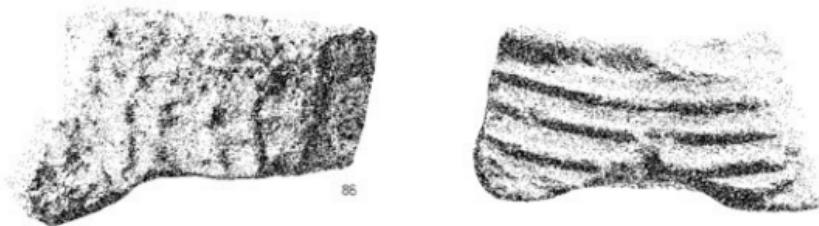
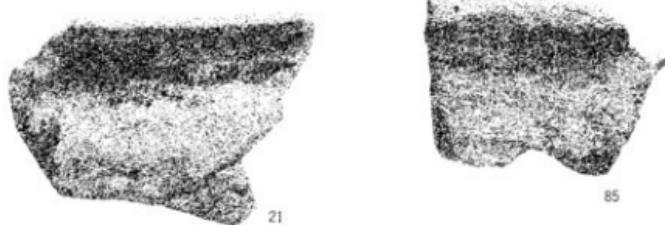
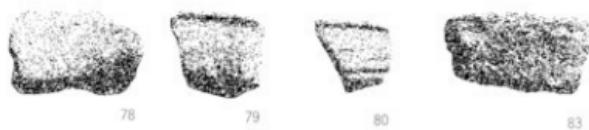
(8) 溝 S D2909遺物出土状況



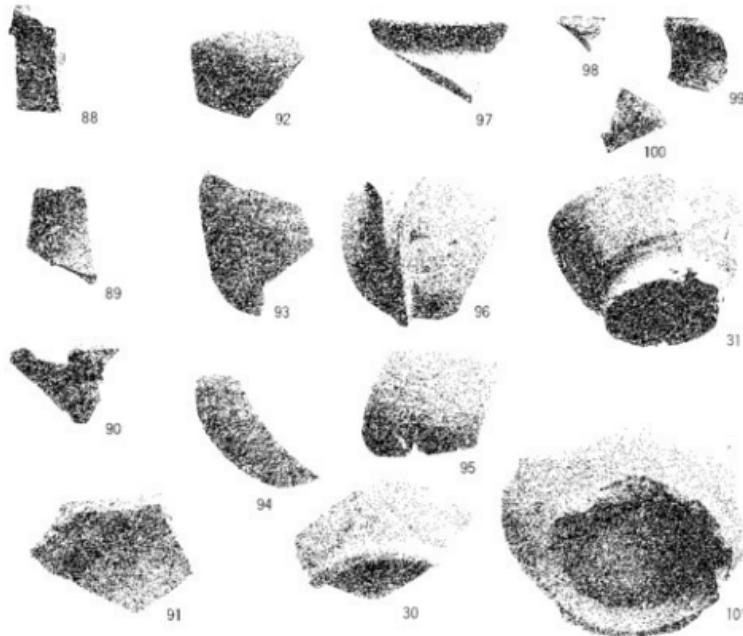
井戸 S E2907出土須恵器・綠釉陶器



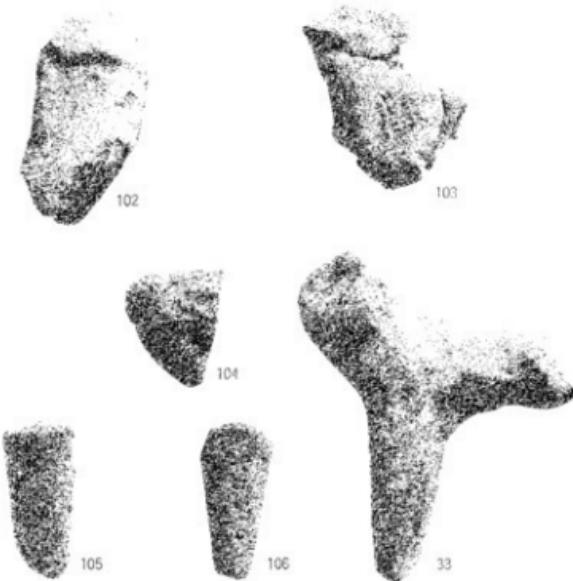
井戸 S E2907出土土師器・須恵器



井戸 S E 2907出土土師器・瓦・凝灰岩



(1) 井戸 S E 2907出土須恵器・灰釉陶器



(2) 各遺構・包含層出土土馬



7



44



36



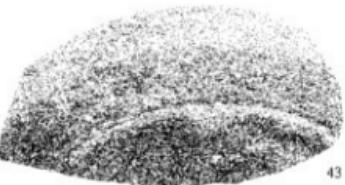
42



46



45



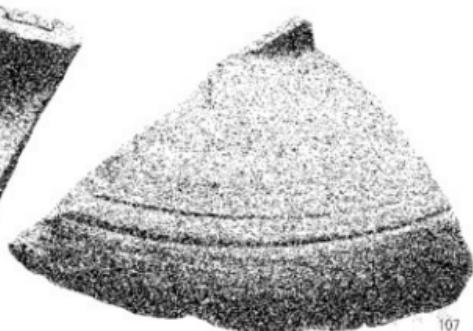
43



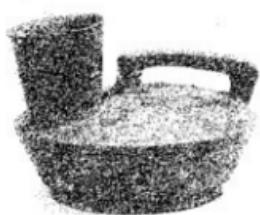
52



37



107



(1) 井戸 S E2907出土平瓶



39



40



108



(3)

井戸 S E2907
出土土師器蓋
つまみ部

111



77

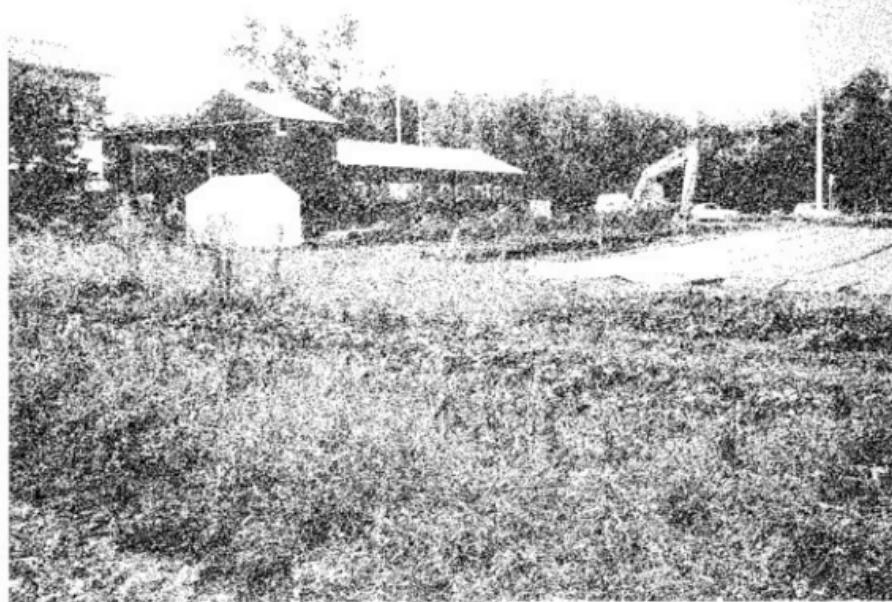
(4) 井戸 S E2907出土黒色土器

(5) 土塹 S K2913出土鉄釘



113

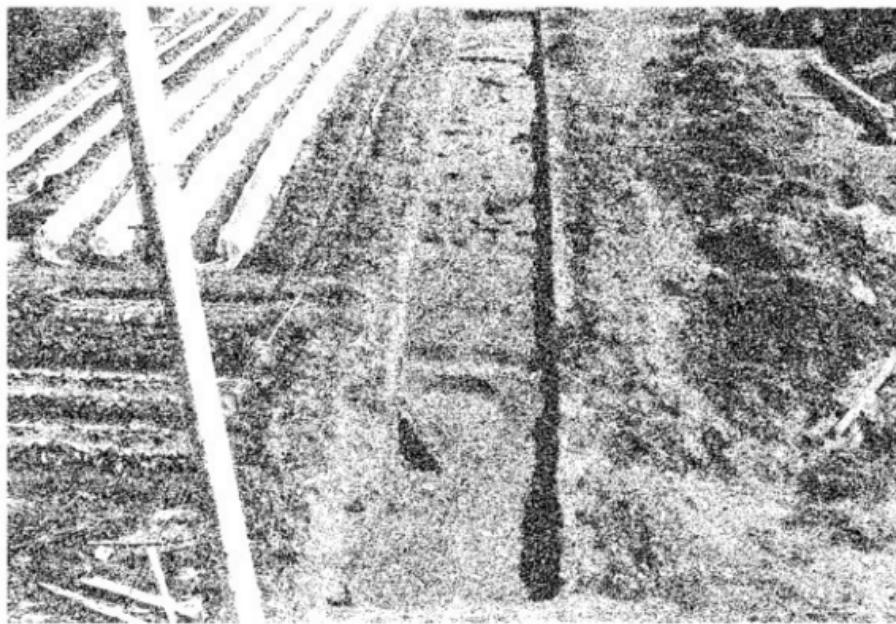
(6) 溝 S D2909出土土師器高环



(1) 調査地近景（北東から）



(2) 上層造構全景（西から）



(1) 下層遺構全景（西から）



(2) 下層遺構（南東から）



(2) 溝 S D 4804遺物出土状況（東から）



(4) 溝 S D 4804遺物出土状況（東から）



(1) 溝 S D 4804遺物出土状況（南西から）



(3) 溝 S D 4804遺物出土状況（南西から）



2



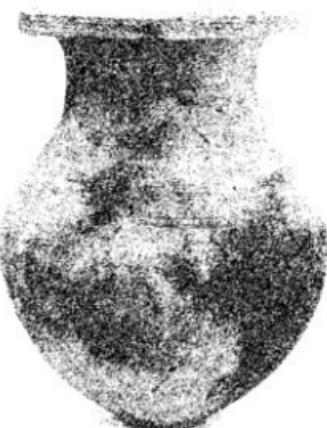
6



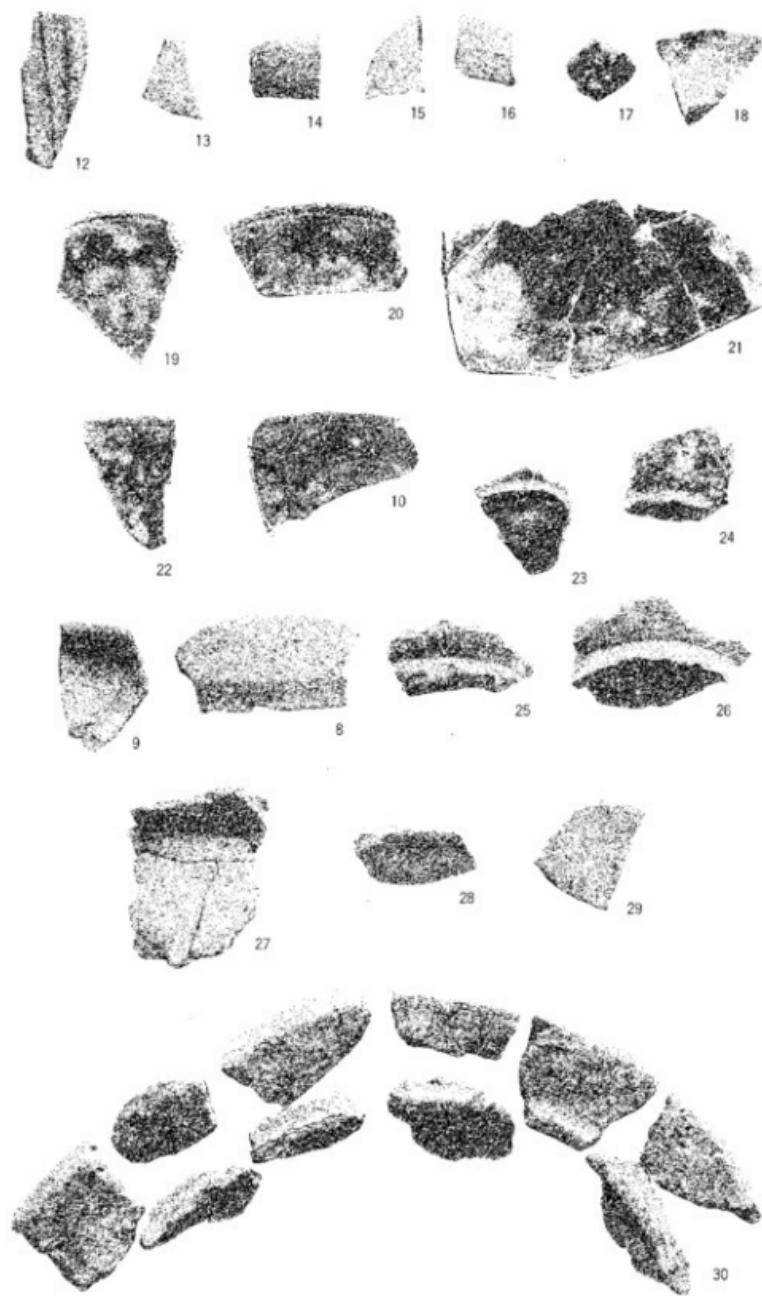
4



3



7



遺構・包含層出土遺物

長岡京市文化財調査報告書 第19冊

発行日 昭和62年3月31日

編集 長岡京市教育委員会
〒617長岡京市開田一丁目1番1号
発行 長岡京跡発掘調査研究所
〒617長岡京市久貝三丁目3番3号
中山修一方

印刷 株式会社 同朋書
同朋印
京都市下京区中堂寺鍵田町2
(075) 361-9121